

1 家康には秀吉でさへ負けた。

息子にさへ遠慮する。

2 月さへあれば夜道は平氣だ。

死にさへすれば責任は免れる。

(1)は甚しいものを舉げて一般を證する意である。秀吉を以て凡庸人に勝目のないことを證する。(2)は唯其れ一つ必要な意である。

「さへ」の語源は「其方^ツ」である。「其方^ツ」で前言を指示して意味を強めるのである。文語では「さへ」を、其れへ更に加へる意に使つた。

「すら」

「すら」

秀吉ですら家康には負けた。

父親にすら反抗する。

「すら」は「さへ」の第一義と同様である。語源は「其等^{ツラ}」である。

「など」「なぞ」「なんぞ」「なんか」

活動へなどつひ行つたことがない。(活動へなぞ、活動へなんぞ、活動へなんか)

私決して忘れてなんか居りません。(忘れてなんぞ)

「など」「なぞ」「なんぞ」は「何孰^{ナニドシ}」、「なぞ」は「何其^{ナニツ}」の略音で、「なんぞ」は「何其^{ナニツ}」の音便である。「なんか」は「何彼」である。何れももと形式名詞であるが、これが連用語へ附けば提示の助辭になる。

「など」「なぞ」「なんぞ」「なんか」

例示であるから物を疎外する意が有る。右の例では「活動へ」や「忘れて」を疎外してゐる。

「か」「やら」

「か」「やら」

「か」は感動助辭中の疑問の助辭であるが、之を特提の助辭として用ゐることが有る。又名助辭として用ゐることも有る。

疑問の助辭

1 此處は何處ですか。

特提の助辭

2 何處へか行つた。

名助辭

3 何處かへ出つた。

(1)は「か」で意味が切れる。終止格の疑問態である。(2)は連用語「何處へ」を提示して不定の意にする。(3)は疑問名詞「何處」の無格なものへ附いて不定名詞を作る。その不定名詞はやはり無格であつてその下へ「へ」が附いて始めて客格になる。(2)の様に「何處へ」といふ客格になつてゐるものへ「か」が附くのと意味のぐはひが違ふ。

提示以外の用法

提示以外の用法

特提の助辭の中、單に提示助辭としてのみ用ゐられるものは「しか」「ほか」「こそ」でも「の」

四つであつてその餘のものは皆提示助辭としてゝない用法が有る。そうしてそれは多く名助辭としてゝある。第三七頁に詳説する。

名助辭

第五節 名助辭

本來の名助辭

名助辭は名詞の如く事物を表す意義の有る助辭である。もとより助辭であるから單獨には使へない。必ず他語を戴き他語と共に一名詞を成すのである。例へば「私ども」「弟ども」「ども」の類である。「ども」だけでは一名詞を成さないが、「私ども」「弟ども」は何れも一名詞である。そうしてその名詞の内部の主要な部分は「私」「弟」ではなくて「ども」である。「私ども」「弟ども」も皆「ども」の一種である。

名助辭の重なるものは次の如くである。

さん	校長さん	和尚さん	さま	旦那さま	奥さま
ら	此れ等	其れ等	たち	親たち	人たち
ども	私ども	人足ども	がた	華族がた	殿がた

尊稱

「さん」「さま」は尊稱に用ゐる。直接にその人を表示することはその威尊を瀆冒するやうな感じが有るから、その人の様子を指してその人を間接に表示するのである。

「さま」の一用法として「御せは様」「御氣の毒様」「御手数様」「御都合様」などの様に使ふことが有る。これらは「……様」を名詞として「御せは様をかける」「御都合様に由つては」などの如く用ゐることもあれば、「……様」を無活用形容詞として「御世話様なことだ」「御氣の毒様な人」などの様に用ゐることもある。前者の「様」は名助辭で後者の「様」は無活用動助辭である。無活用動助辭の場合は下へ「〇、に、〇、〇、〇(ニ活)」「だら、だり、だり、だ、だれ(特ラ變)」「でせ、でし、です、です、ですれ(特サ變)を附けて活用を與へる。

「さん」「さま」の語源

「さん」は「さま」の音便である。「さま」の語源は「さ」と「ま」との結合であらう。「さ」は「遠さ」「長さ」「行くさ」「歸るさ」などの「さ」であり「ま」は「懲りずま」などの「ま」で、「多み」「深み」などの「み」の通音であらう。「さ」も「ま」も暗にその様子を言ふ語であつて二つが結合して「さま」となつたのであらう。

複數、例示

「ら」「たち」「ども」「がた」は複數又は例示の語である。そうして「ら」は平穩、「ども」は卑稱、「がた」は尊稱である。「たち」は本來は微弱な尊稱であつたが今では平稱にも用ゐる。

複数は相等しい個體が二つ以上ある意で、人が數人居るのを「人たち」といふ類である。例示は多數の事物の中の一ニを以て多數を代表させるのである。「私ども」などはそうだ。私といふものは一人であるが「私」以外の人も代表する。私が數人居るのではない。「等」は東京語では餘り使はない。「百圓か其處らの金」幾らです「此處方ら」「其處方ら」「彼處方ら」「何處方ら」「方」は「方」の通音で發音は「い」など場所や數量の例示に用ゐる。「我等」「彼等」など云ふのは卑俗の語である。「僕等」「君等」「此れ等」「其れ等」などいふのは文語の利用である。「お前ら」「私ら」「あの人ら」「子どもら」などいふのは方言である。「等」はもと「清ら」「青ら」「侘しら」「行くらむ」「散るらし」などの「ら」と同源であつて類似した状態を指す語である。

「ら」の語源

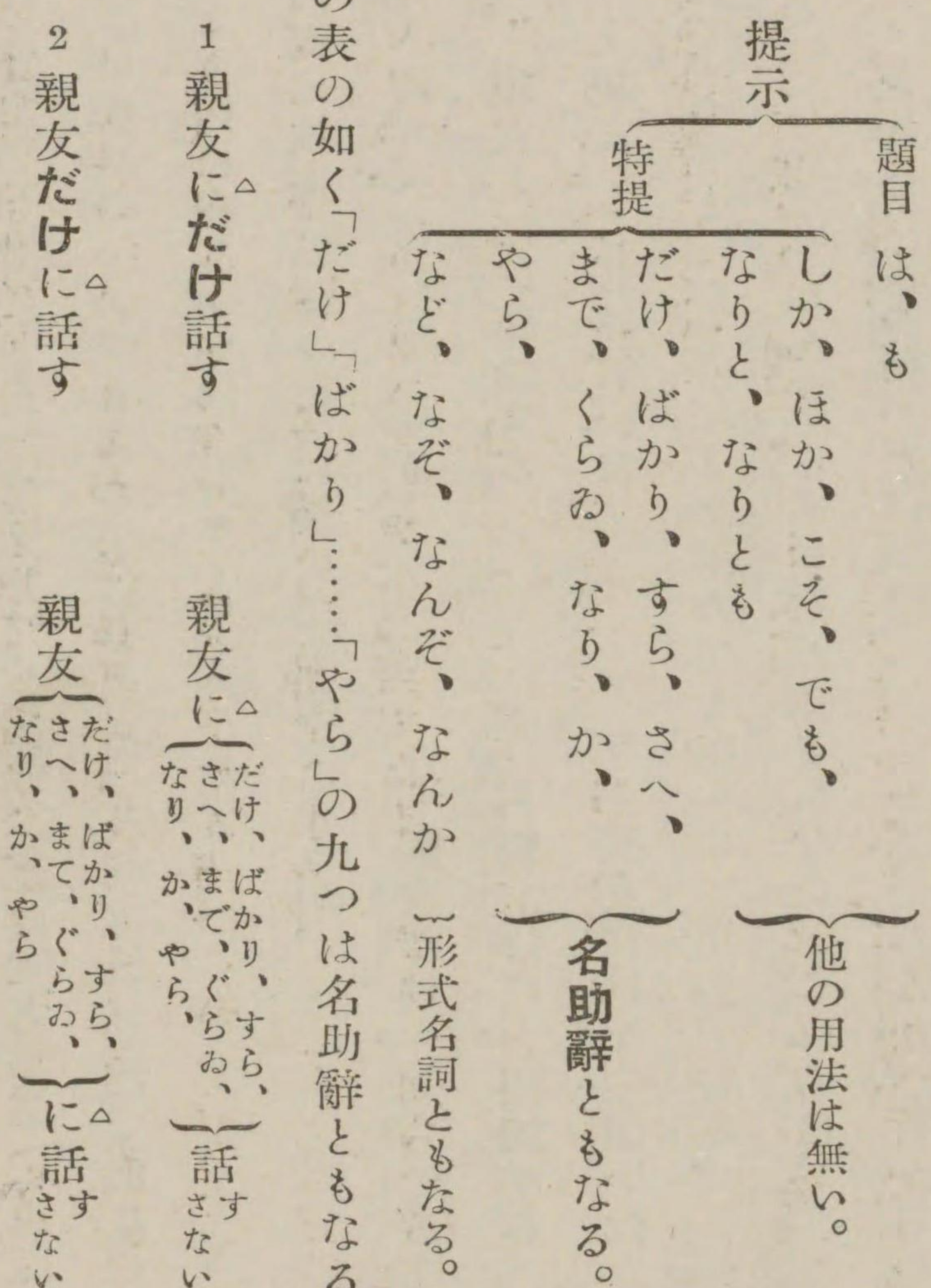
「たち」は「友どち」「親子どうし」などの「どち」「どうし」と同源である、性質を「たち」といふのも「立ち」の意で同源であらう。つまり類似した性質のものを廣く指して「何々たち」といつたのであらう。

これらの名助辭は從來は多く一般的助辭と見ずに接尾語と見て居た。しかし尊稱や複數などは文法上の一般的形式であるから之を一般的助辭と見る方が善いと思ふ。

提示助辭と名助辭

提示助辭にもなる名助辭

右の外提示助辭の中に、名助辭として用ゐられるものが澤山有る。今提示助辭に就いて他の用法の有るものと無いものとを分けると、次の表の如くなる。



右の(1)では「だけ」「ばかり」……「やら」が提示助辭であるが(2)に於ては名助辭である。(1)の

「親友に」は連用語であるから其れへ附けた「だけ」は提示助辭である。然るに(2)の「親友」は單なる名詞であつてまだ格はない。それへ「だけ」が附いてもやはりまだ無格である。「親友だけ」は無格の一名詞である。だから(2)の「だけ」は名助辭である。格を示す「に」は(1)では「だけ」より内に在り(2)では「だけ」より外に在る。

右の例は依據格(何々に)に就いての例であるが、

- 1 親友へだけ知らせる
- 2 親友だけへ知らせる
- 1 親友とだけ相談する
- 2 親友だけと相談する
- 1 親友からだけ聞いた
- 2 親友だけから聞いた

の如く「へ」と「から」などを用ゐても(1)(2)の二用法が有る。

形式名詞と

「なぞ」「なんぞ」「なんか」は名助辭にはならない。これらは

- 1 芝居へなんか行かない
- 2 芝居なんかへ行かない

の如く(2)の「なんか」は名助辭ではなく立派に名詞である。たゞ意義が形式的だから之を形式名詞といふ。

名助辭の中には文法上の一般的なものではなく特殊なものもある。たとへば「長さ」「深み」「十

人前」「三年ぶり」の「さ」「み」「前」「ぶり」の様な類がそうだ。こゝにいふ特殊な名助辭は之を接尾辭といふ。

第六節 副助辭

副助辭

副助辭は、副詞の如く他語を戴いてその戴いた他語と共に一副詞を構成する助辭である。例へば「歩きながら話す」の「ながら」などがそうだ。「ながら」は他語「歩き」を戴いて「歩き」と共に「歩きながら」といふ一副詞を成す。副助辭が他語を戴いて出來た副詞は、皆變態副詞であつて正態副詞ではない。例へば「歩きながら」は副詞であつてもその上部「歩き」は動詞性が有るから、全體としては動詞性副詞である。それでも副詞には相違ない。

本來の副助辭の重なるものは

- 1 ばかり 一年ばかり懸る
- 一里ばかり歩く
- だけ 一日だけ休む
- 百圓だけ使ふ
- ぐらゐ 一年ぐらゐ懸る
- 百圓ぐらゐ使ふ

まで 夕方まで待つ 次の驛まで歩く

ほど 死ぬほど苦しい 山ほど有る

二づゝ 一圓づゝ遣る 十頁づゝ讀む

ながら 泣きながら話す 自分ながら恥しい

がてら 物を買ひがてら散歩する 買物がてら行く

などである。用例の中の「——」だけが一副詞になる。

右の(1)は名助辭としても用ゐ得る。

あと一年ばかりになつた この中百圓だけを遣る

一年ぐらゐが關の山だ 此處までが精々だ

の「——」は名詞であるから、中の「ばかり」「だけ」「ぐらゐ」「まで」はその名詞の代表部であつて即ち名助辭である。しかしこれは皆副助辭を名助辭化して使ふのである。

「ばかり」「だけ」「ぐらゐ」「まで」は提示加辭にもある。提示助辭の「ばかり」「だけ」は文語の「のみ」の意だが、副助辭の「ばかり」「だけ」は事物の分量を表す語で「ほど」の意に近いものである。例へば「私だけ行つた」の「だけ」は提示で、「一冊だけ讀んだ」の「だけ」は分量の副助辭である。「くらゐ」「まで」も二通り有る。「手紙ぐらゐ書けるさ」「他人にまで話す」の「——」は提示。「十圓ぐらゐする」「東京まで行く」の「——」は副助辭。

接尾辭

副助辭の中

家が有り次第轉居する。

學校ちゆう大騒だ。

五人とも揃つた。

時計を鎖ぐるみ偷まれる。

の「次第」「ちゆう」とも「ぐるみ」の様なもの、文法上の一般的な形式的意義を表すものではなく特殊な形式的意義を表すものであるから、之を特殊副助辭とする。世間では之を接尾語といつてゐる。私は接尾辭と云はうと思ふ。但し世間では副助辭の全部を接尾語と稱して特殊な形式的意義を表すものと見て居る。一般的と特殊との區別は程度の問題であるから、そう見ても差支もなからう。

第七節 頭助辭

總説

頭助辭は助辭の一種であつて、他の語の頭に冠して他語と共に一連辭を成すものである。助辭を分つて動助辭、靜助辭、頭助辭の三つとするのであるから、頭助辭は動助辭靜助辭と同様で一章を立て、説明すべきであるが、其の數が甚だ小さいから、靜助辭附頭助辭と

頭助辭

いふ一章の中の一節として靜助辭へ附説することにしたのである。

従來の文法書には接頭語といふ名目が有つて頭助辭といふ名目は無かつた。この従來接頭語と云つたのも、廣義の助辭の一種であつて、廣義の助辭の中、他語の上へ附くものを指して謂つたのであつた。なせ頭助辭と云はなかつたかといふと、其れは文法上必要なものでないと思はれたからである。例へば「み山」を川「さ夜」ま清水「のみ」を「さ」まの類である。然るに「貴方のお帽子」先生のお机「のお」などは敬語として文法上極めて必要な極めて一般的なものである。こゝにいふの接頭語として化外の民の如き待遇を爲すのは不都合である。故に私はこれら他語の上へ附くものを總括して頭助辭とし、その中「お」の様なものを一般頭助辭とし、「み」を「さ」「ま」の様なもの特殊頭助辭としようと思ふ。便宜上一般頭助辭を單に頭助辭と呼び、特殊頭助辭を接頭辭と謂つても善い譯である。

一般頭助辭

一般頭助辭

一般頭助辭は文法的頭助辭である。それには「御」「大御」の三つが有る。この三つは何れも尊稱又は美稱であつて體言へ附くものであるが、「御」に限り用言の形容詞へも附く。

「お」

「お」「おみ」「ご」の接續 「御」は「お机」「お心」「御歩き」「お寒い」などのやうに用ゐるもので、もと「大」の略音である。そのものを大きいものとして稱へていつたのである。文語でも「御前」「御許」「御山」など用ゐるが、多くは「御涙」「御情」などの如く「おん」と云つた。「おん」は「大御」が「おほん」となり「おん」となつたのである。

「お」

「お」はもと固有の日本語であつて字音のごつ／＼した語とはなじまない。「お年」「お名前」「おからだ」と云つても「お年齢」「お姓名」「お身體」とは云はない。しかし字音でも十分熟したものであれば訓の語と同様に感ぜられて「お」が附く。「お銚子」「お土瓶」「お寫眞」などいふ。「お」は母音に始まる有形名詞へは付きにくい。例へば「足」「裕」「帶」などへ附かない。それは「お」が「母音」と連なると長音又は二重母音になり易いから意義が不明瞭になるからである。そゝういふ場合には先づ「御」を付けて「み足」「み裕」……の如くした上で「お」を付けて「おみ足」「おみ裕」「おみ帶」「おみ御髪」「おみ御附」「おみ御かず」「おみ御膳」「おみ御腹」などといふ。但しこの説明に關しては二つの注意が必要である。注意の第一は「御」の附くのは必ずしも母音に始まる語のみではない。「御輿」「御籤」「御酒」などの類もある。それへ「お」が附けば「お御輿」「お御籤」などゝなるのは當然である。注意の二は「お」が母音に始まる有形名

「おみ」

詞へ附きにくいといふのは唯附き憎いだけで、全く附かないのではない。例へば「おあねえ様」「おあにい様」「お奥様」「お足(錢)」「お垢」「お跡」「お醫者」などの様な例もある。

「お」は「お帽子」「お二人」などの様に名詞へも附き、「お歸り」「お言ひ」などの様に動詞へも附き、「お静か」「お立派」などの様に形容詞へも附くが、大體に於て體言へ附くのである。「歸り」「言ひ」などは活用の第二活段が固定して無活用化したもの、「静か」「立派」などは本來の無活用である。動作詞でも形容詞でも無活用のもは名詞でなくても之を體言といふ。意義が實質化されてゐる。

右の特例として「お」はク活シク活の形容詞へ附いて「お早い」「お遅い」「お白い」「御若い」「お喧しい」「お久しい」などの如くなる。これは用言であつて體言ではない。「お」が用言へ附くのは唯ク活シク活に於てだけである。動作詞では決して「お云ひます」「お歸りませう」などいふことはない。

方言に於ては「お歸りる」「御行きる」「御出てる」などいふがこれも語源に溯れば「御歸りある」「御行きある」「御出てる」であつてやはり體言化されたものへ附いたのである。現在では「お歸りる」「御出てる」等は既に上一段活下一段活になつてゐるが、それは「お」が附いた後で活用するので、活用するものへ「お」が附くのではない。その證據には「お」なしに「行きる」「歸りる」などと云はない。「出る」は本來下一段であるから「出る」と云へるが「御出てる」の「出

てる(出で有る)とは違ふ。

文語で「御」は動作詞(用言の)へは附かないと斷言して古事記萬葉の訓法を正した三矢博士の名論は、口語の「お」にも妥當であると同時に、口語の「お」が動作詞(用言の動作詞)へ附かないことは三矢博士の斷言を裏書するものである。

「み」も固有の日本語である。これは「深山」「三吉野」「眞清水」「眞心」などの「み」「ま」と同源の語であつて、もと稱へていふ語である。其れが尊稱となるに至つて別の助辭となつたので、古い文では盛に用ゐられたのであるが、口語では上に「お」を戴いて「おみ」となる場合にのみ用ゐられる。

「おみ」は單に名詞へ附くだけである。それも作用を表す名詞へは附かない。故に「お受け」「お送り」「お起き」「お空き」などが名詞であり且つ「お」が母音の前に在つても之を「おみ」に換へることは無い。

「御」は「み」「おほん」「おん」と讀むのに用ゐた漢字「御」の吳音である。漢字の字義は天子に關する敬語であつたが、訓にひかれて「ご」は「おん」と同義の頭助辭となつた。しかし元字音であるから字音の上でなければなまじまい。必ず「御年齢」「御精神」「御立腹」「御満足」な

どの様に使ふ。「御」といふ字を書いても「お」であるか「ご」であるかは下の語に由つて定まるから読み方に迷ふ様な場合は殆ど無い。唯「御丈夫」「御立派」「御試験」など「お」「ご」兩方にいふものも多少あるが、其れも前後の關係で大體は分る。何となれば「お」は平易な語で、「ご」は莊重な語であるからである。

「ご」は名詞、動作詞、形容詞、皆附くが、「御精神」「御上京」「御健康」などの如く、凡べて體言(無活用語)へ附くのである。用言へ附くことはない。「御覽じる」などは特例の様だが、これも「御覽」といふ體言を後から活用させて用言にしたのである。「覽じる」へ「御」が附いたのではない。

「お」や「ご」の附いたものに「おなか(腹)」「おつけ(味噌汁)」「おかず(菜)」「ご酒」「ご飯」「ご膳」などの類がある。「お」「ご」を除けば「なか」「つけ」「かず」……は完辭としての語を成さなくなるから、これらは「おなか」「おつけ」……を以て一語と見るべきものである。唯語源に溯つた場合に「お」は頭助辭で「中」「附け」「數」は完辭だとされ、「ご」は形式的の不熟辭(助辭でなく)で、「飯」「酒」「膳」は實質的な不熟辭(完辭でなく)だといふことになる。されは「おみおつけ」「おみおかず」など「お」が二つあるのは何の不思議もない譯である。

所有尊稱

「お」「おみ」「ご」の意義 尊稱は他を敬ふものであるが、如何なる關係のものを敬ふかに由つて種々に分けられなければならない。その中「お」「おみ」「ご」は事物又は動作狀態の所有者を敬ふものであつて、之を所有尊稱の助辭といふ。例へば「貴方の御住ひ」「御父様の御歸り」などいふ「御」は「住ひ」といふ物、「歸り」といふ動作を敬ふのではなく、その所有者たる「貴方」「御父様」を敬ふのである。

一口に所有尊稱と云つても、その運用に種々の區別がある。或は不精密な考察では所有者を敬ふ様に見えない用法さへある。故に所有尊稱はその運用上種々に分たれなければならない。それで名詞に於ては單純用法、美稱、自體的用法の三つが有り、動詞に於ては主體的用法、客體的用法の二つが有る。

單純な所有尊稱

- 一 單純用法 「お」「おみ」「ご」が名詞へ附いて
 - 貴方のお帽子 先生のお靴 お父様のお出で 伯父さんのお歸り
 - 奥様のおみ帯 貴方のおみ足 御母様の御病氣 貴方の御親類

の「」の様になる用法はその名詞の表はす事物——動作狀態をも事物と見て——の所有者(上例では△△)を敬ふものである。そうしてその所有者は單純に考へた所有者であつて

極めて明白である。故に之を單純用法としその名詞のこの態を單純所有尊稱とする。これは「お」「おみ」「ご」の用法の第一義的なものである。

二 美稱 「お」「おみ」「御」には「お茶」「お湯」「お米」「お魚」「おみ汁」「御飯」などの様な用法がある。これらは自分の茶……でも他人の茶……でもいふのであるから、一見所有尊稱ではない様に見える。我々は之を美稱といふ。「お茶」といふ方が語が美で、「茶」といふ方が粗野である。どうして「お」が美稱になるか。それは最初宮中殿中などに仕へた人々は、君の御料の茶を「お茶」と云ひ、自分の飲む場合でも君の給はる茶であるから「お茶」と云ふ様に、自分の周囲の物は一として直接間接に我が君の物でない者はないのであるから、常に「お」を附ける習慣になつた。それが一般に眞似られたのである。例へば里歸りをした場合など其の家の米、茶を「お茶」「お米」……といふ。これが文化の度の低い閭巷の人からは非常に優美に聞える。そこで西施が病氣になつて里歸りした時の様に郷人皆その鑿みに倣つて何でも「お」を附ける。女子の名でも御殿女中の「菊」「梅」は「お菊の方」「お梅の方」である。そういふことが優美に聞えるから女子の名を美しくする爲に一般に「お」を附ける様になつた。美稱の「お」も最初は單純用法の「お」であつた。それが美稱となつたのは所有者の觀念が不

明確になつたからである。しかし全然所有者を認めないのではない。實質的の所有者はなににしても形式的にはその觀念が有る。誰といふことはなしに唯何となく何等か無形な尊い所有者が有る様な味ひが有つて、この味ひが言語を優美にするのである。だから「お」の附いた美稱は單なる美稱ではない。所有尊稱の巧妙な一運用としての美稱である。彼の川、山、夜、玉を「を川」「み山」「さ夜」「ま玉」などいふのも美稱であるが、「お」はそんな單純な美稱と違ふ。

「お」の附いた美稱は婦人語、小兒語である。成年男子の語ではない。婦人は年齢に拘らず美稱を用ゐなければ言語が粗野に聞える。東京の婦人は下賤の女でも美稱を用ゐるが、田舎の婦人は相當の家の女でも美稱が少ない。この點は東京の婦人の語を學ぶべきである。之に反して成年の男子は美稱を用ゐては言語が女らしく柔弱に聞えていけない。地方人には此の弊は少ないが、東京人には教育の度の低い商人などに往々美稱を用ゐて「お湯」「お米」などいふ人が有るのは婦人語の浸潤である。但し眞の所有者を尊ぶ場合にまで「お」を除いてはならない。その點に注意すべきである。

美稱に於ける三音以上の語へ「お」を附けることは迂遠に聞える場合がある。「お肴」「お臺ど

こなどいふ類もあるが、三音以上の場合は第三音以下を略して、「お卵」「おつむ(頭)」「お御足」「お鐵(鐵瓶)」「お腰(腰巻)」などいふ様になつたものもある。この法の著しいものは婦人名である。「花子」「雪子」「芳江」「春代」などいふ様な三音のものへはこう云ふ「お」は附けない。「お」が附けば「お花」「お芳」といふ様に下を略する。

自體所有

三 自體的用法 「お」の用法には「お父さん」「お母さん」「お兄さん」「お姉さん」「お寺」「お宮」「お月さま」「お日さま」「お役人」「お武家」「お一人」「お三人」「御自身」「御貴殿」などの様にいふのが有る。他人の父を呼んで「お父様」と云ふのは、「父」の所有者たる人(子)を敬ふ單純な用法であるが、子が自分の父に對して「お父さま」といふのは所有尊稱でない様にも聞える。しかしやはり所有尊稱である。凡そ物は皆自己を所有する。自己は自體の所有者である。この意味に於いて「父」の所有者は父自身である。所有者たる父を敬ふ爲に所有者たる父を表す名詞を所有尊稱にすることは出来る筈である。しかしそんな變な敬語はどうして出來たかといふと、其れは最初は美稱として用ゐたのであつた。他人の父を呼ぶ時「お」を附ければ敬語であるから優美に聞える。之を自己の父に用ゐればやはり優美に聞えて美稱となる。父に對して美稱を用ゐる習慣が出來ると、美稱を用ゐないことは父に對し

て失禮になり、美稱を用ゐることが禮に合することになる。こゝに於てその所有尊稱は所有者を他に求めずに父自身に求めることになる。それは「父」「母」「役人」「武家」或は「一人」「二人」などの様な人格の名詞、又は「日」「月」「寺」「宮」の様な準人格名詞に限ることである。非人格名詞では美稱は美稱のまゝである。何となれば、婦人が「お茶」を「お無しに」「茶」と云つても茶に對して失禮だとは思はれない。たゞ語が粗野になるだけである。「湯」を「お湯」と云つた所で湯を敬ふ意味は出て來ない。たゞ美稱たるだけである。

「御」の用法には名助辭として下へ附いて、「親御さん」「嫁御さん」「お姑御さん」「弟御さん」「妹御さん」などいふ用法が有る。これは親族關係の語に用ゐるものであるが、現代ではその下に「さん」の有る場合に用ゐる人が有るだけで、大體に於て漸次廢れ行くものである。昔は「さん」の有無に拘らず「父御」「母御」「兄御」「姉御」などその他種々に用ゐられたものである。

この「御」は最初は「伊勢の御」「少將の御」「御たち」などの如く用ゐられ、女房を敬ふ形式名詞であつた。その元は「御前」といふ語(形式名詞)の略語で、「御前」の「御」は頭助辭であつたのである。これが形式名詞となり更に名助辭となつて「父御」「母御」などの如く男女に拘

静助辭(附、頭助辭)

主體を所有者と見る。

らず親族關係の語に用ゐられる様になり、更に又廢滅せむとしつゝあるのである。
四 主體的用法 これは動詞へ冠する用法の中に存し動作状態の主體を動詞状態の所有者として取扱ふものである。

お嬢さまが餘りお晩くお歸りあそばすものですから、奥様が大層御心配遊ばしました。

の「――」などがそうだ。「お嬢さま」は「お歸り」の主であるが、それを「歸り」といふ動作の持主と見るから「歸り」を所有尊稱にして「お」を冠する。奥様は「心配」の主であるが其れを「心配」の所有者と見るから所有尊稱にして「御」を冠する。

この主體的用法は、直接の所有者を敬はずに間接の所有者を敬ふ場合がある。例へば、

間接の所有者

御嬢さまの御歸りがお晩い。

御嬢さま、おいたを遊ばすと御召が御汚れになります。

あの方の、お宅はお庭が随分お廣うございます。

の「――」は所有尊稱の主體的用法であるが、何れも間接の所有者「△△」を敬ふ。直接の所有者は形式上「――」であるが實質的には「△△」が所有者である。「お汚れ」は御召の動作で

直接の所有者

あるが御召が非人格であるから御召を敬はずに御召のその所有者たる御嬢様を敬ふ。

然るに間接の所有者を敬はずに必ず直接の所有者を敬ふ性質の動詞がある。例へば

1 彼の方の御宅には善い犬が御有りになる。

2 彼の方の御宅では善い犬が御生れになつた。(誤用)

1 御別荘の御庭に珍しい菊が御出来になつたさうですなあ。

2 御別荘の御庭に珍しい菊がお咲きになつたさうですなあ。(誤用)

の(1)は善いが、(2)は人が笑ふであらう。「有る」も「生れる」も均しく犬の動作であり、「出来る」も「咲く」も均しく菊の動作であるのに、「お有り」「御出来」は「犬」「菊」の所有者を敬ふから善いが、「お生れ」「お咲き」は「犬」「菊」を敬ふから可笑しい。故に知る、動詞の中には、必ず直接の所有者を敬ふものと、間接の所有者を敬ふ場合のあるものとの二種がある。

其の區別はどうか。「犬が有る」「菊が出来る」などは形式上「犬」「菊」の動作であるが、實質上人が犬を有し、人が菊の發生を所有するのである。こゝにいふ動詞は實質的な所有者が他に求められる。「犬が生れる」「菊が咲く」などは實質的にも形式的にも犬の動作菊の動作である。こゝにいふ動詞は必ず直接の所有者を敬ふ。之を要するに尊稱に於ては形式的な所有者

客體を所有者と見る。

者であるなしに拘らず、實質的な所有者を敬ふのである。

五 客體的用法 自己の動作でも他人に對して爲向ける動作は他人をその動作の所有者と見ることが出来る。例へば

御卒業を御祝ひ申す

御出産を御喜び申す

御仕事を御手傳致す

御意見に御賛成申す

の「 」などはそうだ。「祝ふ」は自分の動作であつても他人に献上する動作である。献上した以上は他人の動作に歸するのであるから、自分の動作でも謂はゞ他人よりの預かり物である。眞の所有者は他人である。故に「御」は眞の所有者たるべき先方の人を敬ふ。之を所有尊稱の客體的用法といふ。

この客體的用法に就いて甚しい誤解を抱いてゐる人が有る。私は嘗て明治の終の頃、當時の廣島縣師範學校長弘瀨時治氏から妙なことを聞いた。「自分が赴任する前から、廣島では「御」といふ字の使用法が定められてゐた。例へば「此段御返事に及び候也」などの如く自分の方の事に「御」を用ゐるのは誤用であるといふことでさういふ「御」は總べて使はないことにし、「此段返事に及び候也」といふことになつてゐた」と、縣の規定か師範學校だけの規定

かはつきりしなかつたが、世に杓子定木といふものが有るならばさういふのをいふのであらうと思ふ。所謂る古を師とせずして私智を闘はすものである。苟くも公の規定を作るならば少しは調べたらば善からうと思ふ。まさかこんな規定は長くは存しなかつたらう。

「お」の誤用 「お」の所有尊稱の客體的用法は總べて直接にその客體たる人を敬ふのである。例へば「若様を御育てする」の「御育て」は直接に若様を敬ふ。「貴方の御仕事を御手傳致します」の「御手傳」も「貴方」を敬ふ。客語は「仕事を」であつても「仕事」は作用であるから人を離れない。故に「手傳ふ」は人を敬ふのである。然るに電車や自動車の田舎者の車掌などがよく

切符をお切り致します。

といふがこれは誤用である。「切る」の客體は切符である。切符を敬ふ筈はない。切符の持主たる客を敬ふつもりではあらうが、切符は有形物であるから人から離れてゐる。切符を敬ふ語を以て切符の所有者を敬ふことは出来ない。或は電氣局か自動車會社で定めた語かも知れないが、そうすればその掛りの役員が東京語を知らなかつたのである。

切符をお切り申します。

切符を切ります。

「お」の誤用

など、改めなければならぬ。「申す」は他人に對して行ふ動作を表す形式動詞であるから如何なる動詞も「申す」が下に有れば「お」を附けて客體を尊ふ所有尊稱にすることが出来るのである。

「お……致します」「お……爲ます」と云へない動詞は、物を客體として行はれる動作を表すものゝ凡べてである。「縫ふ」「打つ」「書く」「持つ」「運ぶ」「取る」「買ふ」等の類皆そうだ。唯人を客體として行はれる動作を表すもの例へば「手傳ふ」「助太刀」「かばふ」「育てる」「教へる」「起す」「ねかす」「尋ねる」「賞める」の類は皆「お……致します」「お……します」と云へる。

特殊頭助辭

特殊頭助辭

特殊頭助辭は又接頭辭ともいふ。

大犬	小鳥	牝牛	牝馬
初櫻	初陣	さ苗	ま夜中
す町人	そつ首	き娘	ど百姓
無考へ	無遠慮	不心得	不さま

いけすかない	もの固い	こつ恥しい	へ難かしい
取り揃へる	さし止める	申し受ける	引つ揃へる

の「——」の類がそうだ。

特殊頭助辭は語源から言へば種々である。

「大」「小」「牡」「牝」「初」などは名詞、形容詞の「大きい」「子」「夫」「妻」「僅々」「初々し」など、同源である。頭助辭の形そのままで名詞などになるものもあるがその場合は意味が變るのである。

「さ」「ま」などは「嬉しさ」「懲りずま」などいふ接尾辭の「さ」「ま」と同源である。

「す」は「す顔」「す手」「す肌」「すっ跣」「すっ裸」「す面」「す小手」「す町人」などの如く用ゐる「素」といふ字を當てる。意義は、露骨で飾りの無い實際のまゝの意である。その露骨を醜と見た場合には古く「しゃ」と云つた。古事記に「あゝしゃこしやえゝしゃこしや」などある。「しゃ」はそれである。古く「しゃ面」「しゃ首」と云つたのは今は「しゃつ面」「そつ首」といふ。「しゃきばる」は「しゃ木ばる」である。「鯨矛」は「しゃ千木矛」で「千木」は「とき(尖)」である。

「か」は「生」といふ字を書く。「生石灰」「き薬」「き醤油」などの如く用ゐる。名詞の「木」から轉

「ど」「だ」

じたもので、「木」は材料の意でまだ調合しない純粹なものをさす。

「ど」は「どう」「どん」と「とう」「だ」「づ」「づう」などともなる。「土百姓」「度膽」「ど出腹」「ど盲目」「どう胡座」「どう頭」「どう真中」「どん底」「どん淵」「どん百姓」「團栗」「駄菓子」「駄目」(團栗の語)「と方も無い」とつ拍子もない「圖星」「づ抜ける」「づう體」などの如く用ゐる。

「土」「度」「團」「駄」「圖」などは當字である。これら皆古語の「嚴」「最」「いち」(いちじろしなど)「痛く」などと同源である。原義は大きい意、甚しい意である。それを古くは善い方に用ゐたが口語では、形ばかり大きくて價値の無い意味、醜い意味、憎らしい意味、甚しい意味、劇しい意味に用ゐるのである。このことは國學院雜誌大正十三年 月號第 頁に一言しておいた。

「無」「不」

「無」「不」は字音であるから最初は不熟辭であつたが後頭助辭となつたのである。名詞の上へ附く。出來上つたものは名詞にもなるが多くの場合は無活用形容詞になる。例へば「不心得を誡める」などでは名詞だが「不心得な人」では無活用形容詞である。意味は「無」は無い意味、「不」は悪い意味(不男)、否定の意味(不行屈)である。

「いけ」

「いけ」は「いけすかない」「いけ存在」「いけづう／＼しい」「いけしぶとい」「いけしゃあ／＼

「もの」

などの如く用ゐる、憎むべく厭ふべき意である。「嚴めしい」「いか物食ひ」「いかつい」「生きる」「なまいき」などの「いか」「いき」と同源の語である。

「もの」は「物固い」「物苦しい」「物悲しい」などの如く用ゐられる。「物固い」は總べての中に何ものか固いと思はれる或るもの(或る點)が存するので、それが何物であるか一寸言へない意である。

「へ」は「屁理屈」へ難かしいなどの如く用ゐる、擱へ所のない價値のないことをいふのである。

分離動詞

「取り揃へる」などの「取り」はもと形式動詞である。「取りも揃へず」「取りも合へず」などの如く「も」などを挿むことも出来る。「も」の有る場合の「取り」は形式動詞であるが、「取り揃へる」「取り繕ふ」などいふ時は下の語と融合してアクセントまで變つて一完辭化するのであるから、その場合の「取り」は頭助辭化したものといふべきである。「さし」「申し」「引き」等其の他こいういふものは頗る多い。これも所謂る分離動詞の一種である。

象形動詞と
模型動詞

第七章 動詞の小分

第一節 象形動詞と模型動詞

總説

動詞に動作詞と形容詞との二種あることは前に第六―三頁に説いた通りである。世間では動作詞だけを動詞と稱し形容詞を獨立の品詞としてゐるが、それは不合理である。

私が動詞といふのは動作詞形容詞の二種を合せ稱するのである。その動詞の中普通の人が動詞とも何詞とも判断し兼ねる様な特殊なものが二種ある。私は之を象形動詞、模型動詞と名づけ、普通の人々が直ぐ動詞形容詞と思ふ様なのを記號動詞と名づけようと思ふ。

記號動詞とは聲音を單に概念の約束的記號として用ゐた動詞である。例へば「見る」「歸る」「讀む」「打つ」「長い」「多い」……などの様な、普通、動詞と考へられるやうなものである。「見る」は單に「み」と「る」と二音續いたものを或る概念の記號にしたゞけであつて、聲音と概念との間に何等の自然的關係が無い。約束さへ成立すればどういふ聲音を用ゐても善いので

記號動詞

動詞の三種

ある。

勿論「見る」といふ動詞の成立するに至つた経路から言へば、聲音と概念との間に自然的關係が有つたのであるが、それは語源の問題である。出來た結果に於ては語源は問題ではなくて、その表示は全く約束的記號に過ぎない。

象形動詞

象形動詞は聲音が單に概念の記號としてでなく、概念を描いた繪畫として用ゐられるものである。例へば「がたつく」「ぐらつく」などの類である。抽斗があまり緩い場合には出入の際に「がた」といふ様な音がするから「だかつく」といふ。單に「鳴る」「響く」などの記號動詞と違ひ、如何にも「がた」といふ様な音を發しさうな感じがする。この感じが記號動詞と異なる點である。記號動詞であるとするればその語を知らない人には全く意義が分らないが、象形動詞の場合は臆げながら意義のぐはひがわかる。之を喩へて言へば記號動詞は字のやうなもので、字を知らなければ分らないが象形動詞は繪のやうなもので、無學でも、繪だけは多少分る。しかし「がたつく」の「がた」は眞に「がた」といふ音を表すのではない。たゞ

音畫

象形動詞

「がた」と云ふ音でも出るやうな気分を表すだけである。それは「ぐらつく」などの場合に明瞭である。椅子の足がぐらつくといふ場合「ぐら」といふ音は發しない。若し音が有つたらば「ぐら」とでも云ひさうな感じが有るだけである。

されば「ぐら」や「がた」のやうなものを音畫といふ。音で動作のぐはひを描いた畫といふ意である。「ぐら」が眞に「ぐら」といふ音を表すならば吾々は之を音の模型といふ。眞の音を表すのでないから之を象形といふのである。象徴といふ語も有るが、それは意味が少し廣過ぎる。

音畫といふ語は廣義には象形の意にも用ゐられるが、嚴密に言へば音で描いた畫でなければならぬ。然るに象形動詞の中には音でなくその音の表す意義で畫いた畫がある。

語畫

花々しい

毒々しい

長々しい

ばか／＼しい

女中々々してゐる

子供々々してゐる

の「／＼」の類がそうだ。これを語畫といふ。凡そ語を二つ重ねるのは單に二つの動作や二つの事物を表すのではなく二つの配合に由つて或るダイメーションを表さうとするもので既に一種の畫である。この意義に於て語畫が成立する。

畫々

又既に畫になつてゐるものを材料にして更に大きい畫を描くことが有る。

がた／＼

ぐら／＼

ばた／＼

のそ／＼

がたびし

ちらほら

ぢたばた

すたこら

「がた」だけで既に音畫であるのに其れを二つ重ね又は音畫「がた」と「くた」とを連ねて更に大きい畫を描く。こゝにいふのを畫々と云ふ。

これはやはり畫であつて畫々ではないと云ふ人もあらう。しかし「子供」といふ名詞から「子供供してゐる」などいふ「子供子供」の様な語畫が出來たと云へるならば「がた」といふ音畫から「がたがた」「がたびし」といふ畫々が出來たと云へると思ふ。「がたがた」は「がた」といふ状態の繼續した状態、「がたびし」は「がた」と「し」とに因つて代表された複雑な状態であつて別のものである。單に二つの状態の枚擧ではない。換言すれば「がたびし」は「がたびしし」ではなく「がた×びし」である。

象形動詞にも活用の有るのと無いのとある。

がたつく

べたつく

ぐにやつく

ぬらつく

へたばる

しやきばる

くたばる

のさばる

まめ／＼しい

そら／＼しい

ぶら／＼しい

さう／＼しい

などは有活用である。

がた	ぐら	ばた	どさ
ぱつ	かつ	さつ	ちよつ
青々	黒々	静々	子供子供
轟然	堂々	躊躇	恬淡

などは無活用である。

無活用の象形動詞は活用なしでどうして使ふか。それは断定の動助辭の「○、と、○、○、○」を附けて之に活用を與へる。

1 がたとする がたんとする ぱつとする かつとする

2 がたと鳴る がたと落ちる ぱつと散る かつと怒る

の「――」の如くに用ゐる。そうするとト活の一形容詞となる。その格は(1)の「――」は一致格(第四三頁)で下の「――」に對して客語(内包的客語)になる。(2)の「――」は状態格(第二七頁(三))で下の「――」に對して修用語(連用的修飾語)になる。

無活用の象形動詞の中には無活用のまゝで用ゐ得るものもある。例へば

1 がつたりする がた／＼する ぱつぱする かつかする(顔など)

青々する 子供々々する 躊躇する 辟易する

2 がつたり落ちる がた／＼揺れる 金をぱつぱ使ふ 火がかつか興る

の「――」の類である。その格を一般格といふ。(1)では下の形式動詞に對して補語になり、(2)では下の動詞に對して修用語になつてゐる。

この無活用のまゝで補語や修用語になる用法は和語型のものでは下に「り」の有るもの(例、がちり、のそり、ぐらり)又は二つ重ねたもの(例、ぐら／＼、ぱつぱ、青々)である。漢語型のものでは下に「然」のあるもの(例、卒然、突然)又は二つ重ねたもの(例、堂々、轟々)である。但し「躊躇」「辟易」「枯槁」の様な、本來、動作詞であるものは直接に「する」の上に用ゐられる。

象形動詞は往々副詞と誤られる。しかし副詞には敘述性が無いが象形動詞は敘述性が有る。

1 黒々と書く 堂々と乗り込む

唳々と笛を吹く 静々と歩く

2 びつたり合ふ さら／＼流れる

の「――」に敘述性が有ることは(1)は

副詞と思ふ
誤解

墨[△]黒[△]々と書[△]く

旗[△]鼓[△]堂[△]々と乗り込[△]む

聲[△]唳[△]々と笛を吹[△]く

足[△]音[△]静[△]々と歩[△]く

の如く「 」に主語「[△]△」を冠し得ることでもわかる。主語の無い場合でも、それは主語が無いだけで主體の觀念は有るのである。そうしてその動作状態を敘述するのであるから動詞である。(2)の例も

二[△]つ[△]の[△]間[△]が[△]び[△]つ[△]た[△]り。

水[△]の[△]流[△]れ[△]が[△]さ[△]ら[△]／＼。

など云ふ場合がある。

模型動詞

模型動詞

模型動詞は聲音又は、觀念を材料として或る作用の模型を造り、之を以てその作用の觀念を表すものである。例へば

(1) 雀[△]が[△]ち[△]ゆ[△]う[△]／＼と鳴[△]く。

雞[△]が[△]こ[△]け[△]こ[△]つ[△]こ[△]う[△]と歌[△]ふ。

(2) 彼[△]の[△]人[△]は[△]知[△]ら[△]な[△]い[△]と云[△]つ[△]た。

私[△]は[△]そ[△]う[△]だ[△]と答[△]へ[△]た。

(3) の「 」は單なる聲音を以て雀、雞の聲の模型を造り、(4) の「 」は意義ある聲音(言

語)を以て彼の人、私のその時の言語の模型を造つたものである。(4) の「 」も決して私
のその時の言語そのものではない。その時の言語そのものは其の時しか言へない。あとか
ら其の通りに言ふのは皆前の言語の眞似(模型)である。

私[△]は[△]だ[△]め[△]だ[△]と思[△]つ[△]た。

彼[△]の[△]人[△]は[△]善[△]い[△]と思[△]つ[△]た[△]ら[△]し[△]い。

の「 」は觀念を以て作つた私、彼の人の觀念の模型である。模型の材料は觀念であるが
其れは言語に表されてゐる。しかし言語の模型ではない。觀念の模型である。何となれば
言つたのではなく思つたのであるからだ。

右の諸例の「 」は皆動詞である。材料は聲音又は觀念であるが、その出來た模型は作用
の模型である。聲音や觀念は觀方に因つて事物とも觀られるが、模型動詞が之を表す場合
は之を作用として表すのである。例へば

1 遙[△]か向[△]う[△]で歌[△]ふ馬[△]子[△]歌[△]に、此[△]方[△]の[△]馬[△]は[△]急[△]に[△]元[△]氣[△]附[△]い[△]て一[△]聲[△]高[△]く[△]「 」ひ[△]い[△]／＼。

2 此[△]方[△]の[△]馬[△]は[△]急[△]に[△]元[△]氣[△]づ[△]い[△]て一[△]聲[△]高[△]く[△]嘶[△]いた。

の(1)の「 」が馬の鳴く作用であることは(2)の「嘶いた」と同様である。その相違
はたゞ一方は馬鳴そのものゝ模型で、一方は馬鳴の觀念の記號であるだけだ。「ひい／＼」

んを「ひーいーんと鳴いた」といふべき」と鳴いた」の省略だなど、思ふのは俗解である。「ひーいーん」だけで既に馬の鳴く動作を述べた動詞である。吾々は之を模型動詞といふ。模型動詞には本来活用はない。そのまゝで終止的用法になる。

模型動詞には本来活用はないが、若し活用を要するならば、その場合は動助辭の「〇」と、〇、〇、〇を附けて活用を附與する。「〇」と、〇、〇、〇は作用の産果を表す動助辭である。故に一切の語は模型動詞であつてもなくても」とを附ければ動作そのものでなく動作の産果を表す語となる。そうして動作の産果は一つの事物としても取扱ひ得るが「と」を附けた場合は一つの状態(形容)として取扱はれる。故に「……と」は名詞でなく形容詞である。「雀がちゆうく」と鳴く」に就いて言へば、「ちゆうく」は雀の發聲作用とその産果を表し「と」は「ちゆうく」が發聲作用の産果としての一つの状態であることを明確にし「鳴く」は更にその發聲作用を表す。

模型動詞の用法には上述の如く無活用のまゝで用ゐる用法、例へば「馬が一聲高くひーいん」などに於ける「ひーいん」などの様なのと、「と」を附けて用ゐる用法、例へば「ひーいんと鳴く」の「ひーいんと」の様なのと二種有る。然るに「と」を附けた模型動詞は生産性作用の産果を表すのであるから、生産性動詞といふものゝ説明が必要になつて来る。これは象形動詞に於ても同様である。

生産性動詞 ものゝ作用の中にはその作用の行はれた結果として或る産果を生ずるものが有る。例へば「書く」は作用であるが、書けば繪が出来る。繪は畫くいふ作用の産果である。

作用と産果

生産性動詞

〔作用〕	〔産果〕	〔作用〕	〔産果〕
書く	繪	書く	字
いふ(言ふ意)	語 <small>コトバ</small>	いふ(名づける意)	名稱
いふ(發音する意)	聲	思ふ	思想
讀む	聲	泣く	聲
歌ふ	歌	聞く	聽覺

こんな風に多くの作用は産果を生ずるが、その作用の概念の中から産果の概念を控除して眞の作用の部分だけを表す動詞が有る。それを生産性動詞といふ。

支那人は新高山を指して玉山と曰ふ。

の「曰ふ」は生産性動詞である。「曰ふ」の産果は言語又は名稱であるが、「曰ふ」は唯作用だけを表すのでその作用から生ずる産果(名稱)をば表さない。故に「曰ふ」は産果の概念の缺けた半概念であつて、「曰ふ」だけでは全概念としての意義が具備しない。そこでその缺けた概念を補ふために「玉山」といふ客語を取るのである。

國語の「いふ」は種々に用ゐられる語で場合々々に由つて性質が違ふが、漢文では「言ふ」は産果の觀念をも含んでゐるから生産性動詞ではない。故に「曰ふ」と區別して「ものいふ」と訓ずる。「曰ふ」「云ふ」は生産性動詞である。「謂ふ」も主として生産性動詞である。

生産性動詞は、産果に重きを置き、その産果を明示するために他語(客語)をして分業的に之を表さしめる。産果を生ずる作用であつても、その産果に對して注意が淺く、産果を他語に譲るだけの分業が行はれずに、自己の内部に暗に産果の觀念を含んでゐるやうな動詞は、生産性動詞ではない。例へば「各その志を言ふ」「人書を讀む」の「言ふ」「讀む」などがそうだ。言へば言語を生じ、讀めば聲を生じて、「言ふ」「讀む」は産果に重きを置かないから産果の如何に拘らず意味が具備してゐる。こゝにいふ動詞を非生産性動詞といふ。

眞の生産性動詞といふものは澤山は無い。「曰ふ」「以爲ふ」「爲る」「爲る」などは眞の生産性

「言」
「曰」
「云」
「謂」

非生産性動詞

眞の生産性動詞

動詞だと云へよう。

その他は大抵非生産性動詞である。しかし非生産性動詞でも臨時に生産性を帯びる場合がある。例へば「讀む」は非生産性動詞であるが、

あの人は矛盾を「ほことん」と讀んだ。

の「讀んだ」は生産性を帯びてゐる。何となればこれは

矛盾を讀んで「ほことん」と曰つた。

の如き意であつて、讀んだの實質的意義の外に「曰つた」といふ形式的意義を含んでゐる。

實質的意義だけならば生産性は無いが、その臨時に含んだ「曰つた」といふ形式的意義に生産性が有る。そこでその「ほことん」といふ客語も實質的意義に對しては不必要であるが、形式的意義に對して必要なのである。凡ゆる動詞は「いふ」「おもふ」なる「する」等の生産的意義を含ませれば總べて臨時に生産性を帯びる。之を非生産性動詞の生産態といふ。

生産性動詞はその本性から言へば産果の概念が缺けて居るけれども、何等かの事情でその産果が了解されることは有る。例へば「君は行くと云ふが、彼の人は云はない。」の「云はない」は「行くと云はない」の意でその産果が「行く」であることは前からの續きで分る。こゝに

非生産性動詞の生産態

生産性動詞の非生産態

ふのを生産性動詞の非生産態といふ。之に反して上の「云ふ」は生産態である。生産性動詞及び非生産性動詞の生産態はその缺けた産果の概念を補給するために生産の客語を取る。

生産の客語は即ち「……と」であつてト活の動助辭「〇、と、〇、〇、〇」を附けたもの、第二活段である。

ニ活の「……に」及びト活の「……と」の格は一致格である。しかし「……に」と區別する爲に「……と」を特に生産の一致格といふ。それは或るものと産果との一致を表すからである。

小僧が和尚となる。

では「小僧」が「なる」の産果たる「和尚」と一致する。但し生産の一致格に外延(事物)の一致と内包(動作、形容)の一致との別が有ることはニ活の一致格(第二四頁)と同様である。右の例は小僧と和尚との外延の一致であるが、

鳥がかあ／＼といふ。

私はあの小僧を和尚だと思つた。

などは内包の一致である。「鳥」の内包(聲)が「かあ／＼」と一致し、「小僧」の内包(様子)が「私」の思想に於て「和尚だ」といふ判断と一致したのである。

「……と」は形容詞である。

産果を表す「……と」は、名詞ではない。敘述性が有つて動詞(その中の形容詞)である。蓋し産果は必ずしも物ではない。物の内包たる形容も産果たり得る。「和尚となる」の和尚は名詞であつても「と」が附いた「和尚と」は形容詞である。「和尚と」は和尚といふ物ではなく和尚たる状態を表すのである。「……と」が形容性活用であつて形容詞であることは第一九二—二〇〇頁に説いた通りである。

「とて」の音便

「と」へ「て」が附いた「とて」は口語では殆ど用ゐないが、「とて」の音便「つて」はよく使ふ。雀は「ちゆうく／＼」つて鳴く。あの人は「いやだ」つて云つた。

の「つて」は「とて」の音便である。「つて」へ「云ふ」の附いた「つて云ふ」は疎略な語では約つて「つてふ」といふ特殊動助辭になる。

四段活 つては つてひ つてふ つてふ つてへ

である。(文語の「てふ」は「といふ」であるから少し違ふ。)

私、善いってはない(善いと云はない)

あの人はいやだつてひます(いやだと云ひます)

富士山つてふ山(富士山といふ山)

いやだつてへば善いのになせ云はなかつた(いやだと云へば)

第三四活段の「つてふ」は「ッター」と發音される。第三活段は殆ど使はないが「まい」「や」「べん」を附けることは出来る。

「……と」の種々

ト活の「……と」は全部模型動詞ではない。

1 鳥がかあ／＼と鳴く。 「——」も「——」も模型動詞

2 どうも天氣がはつきりとしな。 「——」も「——」も象形動詞

3 彈丸が雨霞と降る。 「——」は名詞、「——」は名詞性の記號動詞

右の例では模型動詞は(1)の「——」だけである。しかしト活の「……と」は全部産果動詞である。

第二節 形式動詞

總説

實質動詞

名詞に於て「山」「河」の類を本名詞とするが如く、動詞に於ても「行く」「言ふ」「高い」「長い」の類は本動詞である。「此れ」「それ」「彼れ」が代名詞であるが如く、「こんな」「こうだ」「そんな」

形式動詞

「どうだ」は未定動詞である。そうしてこれらは皆實質的意義を有するものであるから名詞ならば實質名詞で、動詞ならば實質動詞である。然るに名詞に於ては「者」「答」「儘」「爲」の類、動詞に於ては「爲る」「爲る」「ある」の類は、形式的意義が有るばかりで實質的意義が無い。こういうものを形式名詞、形式動詞といふ。形式動詞に就いて注意すべきことが二つある。

形式動詞は動助辭ではない。

その一は形式動詞は詞としての一動詞であつて、動助辭ではないことである。動助辭は單獨性が無く、そのまゝでは一詞を成さないが、形式動詞は自己が一つの動詞である。例へば「私は行きます」の「ます」は、「行き」と合して始めて「行きます」といふ一動詞となるのである。「私は明日、ます」などは云へない。然るに、「研究する」の「する」は形式動詞であつて「研究」と「する」とは離れてゐる。「昔は研究もしたが今頃はしない」の如く單獨に用ゐ得る。

形式動詞は實質動詞ではない。

その二は、形式動詞は實質動詞と違つて意義が形式的であることである。唯動作形容の形式的意義を表すだけであつて實質的意義が無い。故に何等かの方法を以てその缺けた實質的意義を補はなければ意義が具備しない。たとへば「私は近頃大に爲ます」など、云つては

事情を知らない人が聞いては要領を得ない。それは「爲ます」に實質的意義が缺けてゐるからである。
形式動詞がその實質的意義の補はれる補はれ方には種々ある。その補はれ方に由つて六種に分たれる。

單純形式動詞

單純形式動詞

單純形式動詞は自己に缺けた實質的意義が補語に由つて單純に補はれる形式動詞である。例へば「勉強する」の「する」は形式語で「勉強」は之に實質的意義を與へる補語である。二者の關係は一方は他方に實質的意義を與へる爲の語であり他方は一方から實質的意義を吸収する爲の語であつて極めて單純な關係である。さういふ形式動詞を單純形式動詞といふ。單純形式動詞には無活用動詞(體言動詞)を補語に取るものと動詞の第二活段(用言動詞)を補語に取るものとの二種ある。

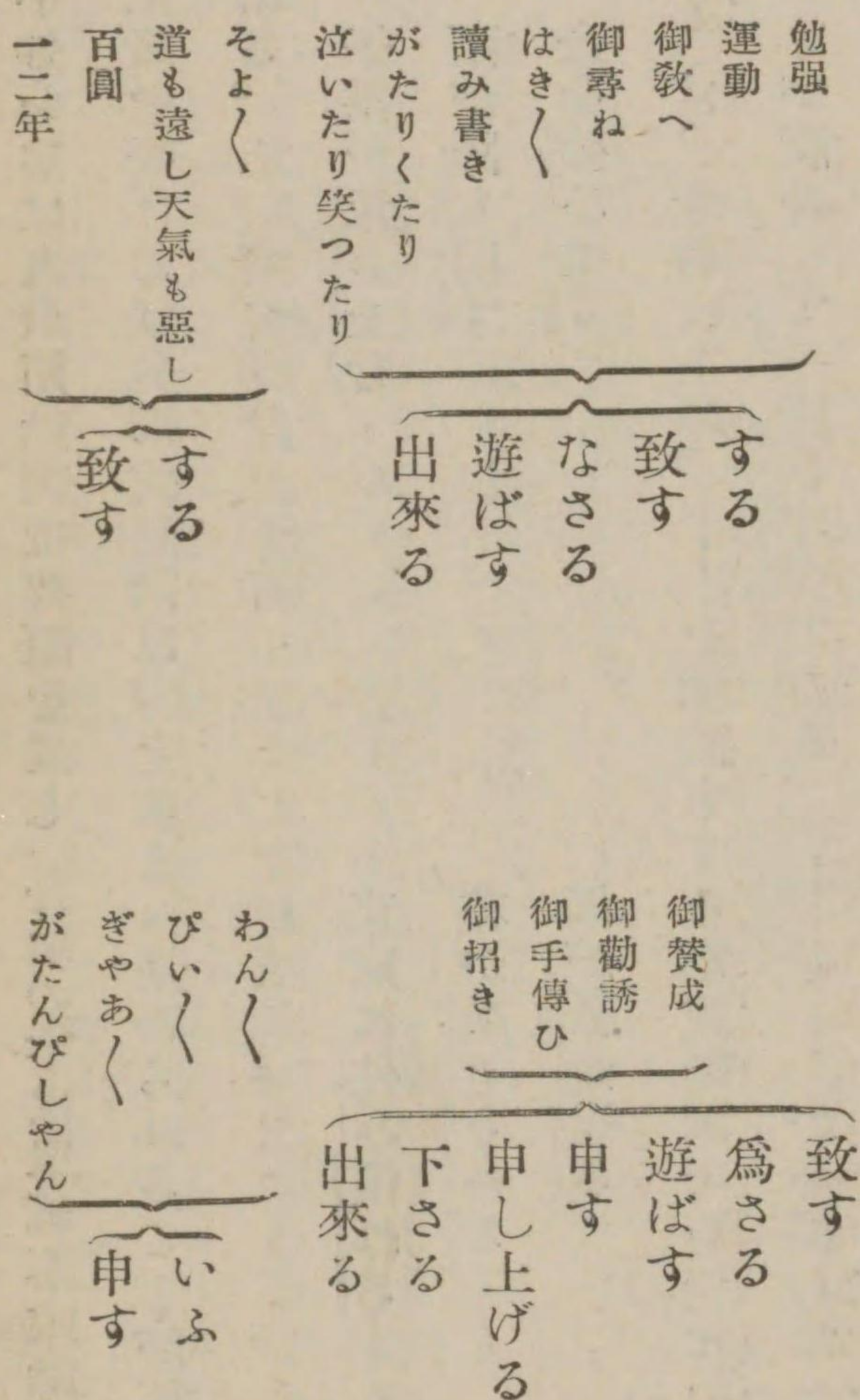
體言動詞を補語にとるもの

無活用動詞といふ中には「勉強」「運動」「出發」「到着」などの様な本來無活用なものもあるが「御歸り」「御忘れ」などの様な或る活段が一時固定して無活用化して用ゐられるものもある。

その何れでも無活用の動詞はその意義が一つの實質として取扱はれるから、動詞ではあるが體言である。この體言なる動詞(無活用動詞)を補語に取る單純形式動詞は

- する〔サ變〕 爲さる〔四段〕 致す〔四段〕 遊ばす〔四段〕
- 申す〔四段〕 申し上げる〔下二〕 下さる〔四段〕 出來る〔上一〕
- 云ふ〔四段〕

の類である。



第二活段を
補語に取る
もの

右の小さい字は無活用動詞で補語を成し、普通の字は單純形式動詞で形式語になつてゐる。第二活段を受ける單純形式動詞は、そのまゝ用ゐられることが極めて稀であるが、有ることは有る。

子供が泣き止む

東京に住み慣れる

雨が降り出す

花が咲きそめる

金を使ひ果す

湯が煮え返る

接尾辭

の「――」は、最初は上の「――」を補語とする形式動詞であつたのであるが、既に「――」と「――」が融合して一詞となつてゐる。「――」が合體した一詞であるならば「――」は一種の特殊助辭(接尾辭)である。然るに文語では古く

住みや慣れけむ

泣きこそやまね

降りぞ出でたる

咲きもそめねば

分離動詞

などの様に「――」が「――」と離れて一詞たる場合が有つた。この場合には「――」は立派に形式動詞である。されば口語でもこゝろいふ現象が全然無い譯ではない。

彼奴のことだから其の位の狂言は遣りも兼ねない。

X

など、どうかすると言はない限りではない。或は又

豫備金を全部を使ひ既^{△△△}に果^{△△△}した以上は……

などいふ様なことは語の抑揚の關係で「△△△」が特に力調を帯びた様な場合には演説などで往々聞くことである。

こゝろいふやうに平素接尾辭たるものが場合に由つて一つの動詞となるのは獨逸文典流に言へば分離動詞である。

修用語を承ける形式動詞

修用語を承
ける形式動
詞

「……て」を受ける形式動詞が有る。

電車で老人に席を譲つてやつた。

の「遣つた」の類である。物を遣る意ならば實質動詞だが、右の例の「やつた」は「譲る」といふ動作が、老人の爲にする動作であるといふ形式的意義を表すのであるから形式動詞である。物を遣るのではなくて席を譲つて之より生ずる好都合(利益)を遣るのである。

「席を譲つて」は修用語である。修用語は世間で連用的修飾語或は副詞的修飾語など稱せら

修用語

れてゐるが、他語の運用を修飾するものである。客語や補語は他語に缺けた意義を補足するもので意義の具備に必要なものであるが、修用語はたゞ修飾するだけであるから意義の具備に必要なものではない。之を除いても意義の具備を傷けない。例へば「彼の人は席を譲つて立つた」の「席を譲つて」を除いて「彼の人は立つた」と云つても意義の具備を傷けない。故に前例の「席を譲つても」、形式動詞たる「遣つた」の意義を補足する爲の語(補語)ではない。然らば之を除いて「彼の人は老人に遣つた」と云つて意義が具備するかといふと其れはいけない。「遣つた」は「席を譲つて」に由つて補足される。この一見矛盾と見える現象をどう解釋するか。曰く、それは間接な利益なのである。日清戦争の頃或る軍人が松魚節をボケツトに入れて居つた爲に、敵弾を受けたが松魚節が壊れたゞけで助つた。松魚節は食料であつて敵弾防禦器ではない。「席を譲つて」は修用語(修飾語)であつて、「遣つた」に對する補語ではない。しかし間接な利用に於て「遣つて」は修用語たる「席を譲つて」に因つて意義の缺陷が補はれる。されば、この「遣つた」の様な形式動詞は修用語に由つて間接に補はれる形式動詞として單純形式動詞と區別される。

一見矛盾

修用語を承ける形式動詞は澤山有る。次の「 」はそうだ。

「来る」「よこす」

友人から茶を送つて来た。

茶を送つてよこした。

茶が来た意ではない。茶を送つて其の効果が来たのである。茶を送つてその効果をよこしたのである。

「居る」「ある」

私は今本を讀んで居る。

字が書いてある。

「私が居る」字が有る」ではない。私が本を讀んでその動作が居るのである。字が、人がそれを書いて其の結果があるのである。

「置く」

教へて置く。

捨て、置く。

「置く」は豫備又は放任である。

「見る」は經驗である。

對手が死んで見れば喧嘩にもならない。

「しまふ」

あの人は死んでしまつた。

まう行つてしまふ。

「しまふ」はその事が、一寸かりそめでなく、完全に行はれる意である。

「上げる」「下さる」「戴く」

教へて上げる(やる)

教へて下さる(呉れる)

教へて戴く(貰ふ)

感謝の意

恩に着せる

「云ふ」

「上げる」はその動作者は自己であつて他人が利益する意、「下さる」は動作者が他人であつて自己が利益する意、「戴く」は動作者が自己であつて自己が利益する意である。故に他人の勞を多しとする感謝の意のある場合にはなるべく「下さる」「戴く」を使ふ方が善い。そうして「上げる」「やる」は恩に着せる意になり易いからむやみに使つてはならない。

あの人は「知らない」つて云つた(おつしやつた、申しました)

「云ふ」「申す」「おつしやる」は模型動詞の方法格「……つて」の下へのみ使ふ。「……つて」は「……とて」の音便で「とて」は「と云ひて」の意である。下へ更に「云ふ」を用ゐても「云ふ」は形式動詞だから差支ない。(漢文の「謂曰」「謂云」の類である。(標準漢文法第二九頁参照) 以上は皆「……て」の下へ用ゐられるものである。

「善い」

斷行して善い(宜しい)。

斷行して構はない。

「宜しい」

斷行したつて善い。

斷行したつて構はない。

「構はない」

明日天氣ならば善い。

明日天氣だと善い。

これは方法格「……て」の下の外、放任格「……だつて」、拘束格「……ば」「……と」の下へも使ふ。

「ならない」
「いけない」
「こまる」

這入つてならない(いけない)處

行かなければならない(いけない)

毎日雨がふつていけない(困る)

雨が降るといけない

これは方法格「……て」の下の外拘束格放任格の下へも使ふ。

「て」と形式動詞との融合

「て」と形式動詞との融合 發音上母音又は「し」「ち」に始まる形式動詞は「て」との間に約

音略音が起つて二詞が融合して一詞となる場合がある。

書いて行く 書いてく

書いてある 書いてたる

書いて御出 書いといで

書いていらっしゃる 書いてらっしゃる

書いてゐる 書いてる

書いてをる 書いとる

書いて戴く 書いてたぐく

書いて置く 書いとく

書いて上げる 書いたげる

書いてしまふ 書いちまふ

書いて頂戴 書いっちゃうだい

書くつて云ふ 書くつてふ

母音に始まらない形式動詞でも頭助辭「御」が附くと「お」は母音だから右の原則が適用される。例へば

書いておよこしなすつた

書いとよこしなすつた

「ことだ」は「べきなり」の意である。

僕は卒業したら自分で商賣を遣るんだ、君は月給取になるのか。

「ん」は「の」の音便。「ん」は其の場合の事情を指す。

伯父さんは中々筆まめだ。丸で御話を伺ふやうだ。

あゝ缺勤続きでは免職になる譯だ。

今日は知事も見える筈ですが、まだ見えません。

私は何處までも此れで押し通すつもりです。

以上の「——」は皆形式動詞である。此等の形式動詞に缺けた實質的意義は上の「△△」なる連語體に由つて補はれてゐる。しかし連體語は元來他語の意義の體を修飾する語であつて他語に對して實質的意義を補ふための語ではない。故に「△△」は下の形式動詞「——」に對する補語ではない。補語でなくて而も補ふ役目をするのは間接な利用である。故に右の例の「——」なる形式動詞は連體語に修飾されて之から間接に實質的意義を獲得する形式動詞である。單純形式動詞の様に補語を承けるのとは違ふ。

右の例の様な形式動詞は何故に連體語を承けるか。それは右の例の形式動詞は皆體言から成立してゐるからである。「もの」「こと」「の」「やう」「わけ」「はず」「つもり」等皆體言である。體言といふのは名詞といふのとは意味が違ふ。名詞でも動詞でも意義が一つの體として取扱はれたものを體言といふのである。「もの」「こと」……等皆名詞としても用ゐられるが、右の例では無活用の動詞として用ゐられたものである。動詞として用ゐられても體言には活用はない。時に由つては無活用のまゝで

知らないことは訊くものよ。 今日には行かないの。

などの如く用ゐ、時に由つては動助辭「〇、に、〇、〇、〇」なら、なり、なり、な、なれ、「だら、だり、だり、だ、だれ」でせ、でし、です、です、ですれ」を附け活用を附與して用ゐるのである。

これらの形式動詞は體言である。故にその缺けた實質的意義を表すのに連體語を用ゐる。文語の「如し」なども連體語を承ける形式動詞である。

形式名詞との區別 右に挙げた「もの」「こと」「の」「やう」「わけ」「はず」「つもり」は皆無活用の形式動詞であるが、これらは用法に由つて形式名詞にもなる。有形物でも無形物でも事物を表すならば敘辭性の有無に拘らず名詞である。事物を表さずに、事物の動作形容を

敘述するならば活用の有無に拘らず動詞である。例へば「水禽の中には美しいのが有る」など「の」は水禽の一部(事物)を指すから名詞である。そういふ用法ならば名詞の格助辭が全部附く。然るに「君は明日内に居るのか居ないのか」などの「の」は君の事情を敘述するものであつて「の」は「のです」の意である。このいふ意味の「の」へは斷定の動助辭や感動助辭は附くが名詞の格助辭は附かない。(第二四頁の形式名詞の條參照)

主語客語を承ける形式動詞

主語客語を承ける形式動詞

形式動詞の中には、自己に缺けた實質的意義を、主語や客語に由つて補はれるものが有る。

「ある」なる「いふ」等及び同義語「ござる」「致す」「申す」「出来る」なども同様である。

△△△△
學識が有る

△△△△△△
立派な息子が御座います。

△△△△
善い音がする

△△△△△△
變な心持が致しました。

△△△△
我慢が成らない

△△△△
辛抱が出来ない

以上の「 」は、主語たる「△△△」を承ける。

○○○○
議論をする

○○○○
心配をなさる

○○○○
交際を遊ばす

○○○○
旅行を致す

以上の「 」は名詞より成る他動格の客語「○○」を承ける。

官吏になる

官吏となる

菓子を供物にする

お禮として菓子を贈る

子の教育は親とある者の義務だ

私としてそんなことは云へません

以上の「 」は。名詞性形容詞よりなる所の一致格の客語「……に」「……と」を承ける。

こうした嘆き

こうした苦み

そうなれば結構だ

× どうあるかこうあるか知らない

私は答へてそうだと云つた

天氣がはつきりとしな

路がよくなる

道をよくする

庭が立派になる

庭を立派にする

襟がきちんとなる

襟がきちんとする

以上の「 」は、形容詞より成る所の一致格の客語「 」を承ける。

以上に擧げた形式動詞は、一、單純、二、修用語を承けるもの、三、連體語を承けるもの、

四、主語客語を承けるもの、四種(六種の中)であつて、何れも他語の下へ用ゐるものである。然るに次に挙げるものは他語の上へ用ゐられる。

接頭形式動詞

接頭形式動詞

接頭形式動詞は他語の頭へ用ゐるものである。

宅の主人は相も變らず植木いじりばかりして居ります。

人といふものは得て自分の利益ばかり圖りたがるものだ。

まるで打つて變つた態度だ。

昨日例の先生がふらりと遣つて來たよ。

の「」は接頭形式動詞であつて下の「」の意義を修飾する。そうして接頭形式動詞に缺けた實質的意義は却て下の動詞「」に由つて補はれる。文語の例を言へば

得言はず

得も言はず

打ち忘る

打ちも寝なむ

の「」の類である。之を接頭形式動詞と名づけた理由は、こゝにいふものを世間の人が接頭語と稱するから、その接頭の二字を利用したのである。接頭といふことは善いと思ふ。

寄生形式動詞

寄生形式動詞

しかし形式動詞であつて助辭ではないから接頭辭ではない。

寄生形式動詞は何等直接の關係の無い前言に寄生し、前言の意義を自己の實質的意義に利用する形式動詞である。

墮落學生が毎日弄花ハチハチに耽つて居ると「八八悪イ直グ來イ」といふ電報が來た。何だ、下らない惡戯をしやあがると、平氣で徹宵弄花を續けた。すると翌朝また電報だ、「ハハ死亡直グ歸レ」。

この「すると」は寄生形式動詞である。本來實質的意義は缺けてゐるが前言「」を承けてその意義を自己の實質的意義に利用してゐる。即ち「……續けた。すると」は「……續けると」と等しい。「續けると」は實質的形式的の二意義を兼ねてゐるが、その二意義を分解して「續けた(實質的)」。すると(形式的)としたのである。然らば前言「」は「すると」に對する補語かといふと、實質上は補語の代用であるが、形式上は補語ではない。何となれば「續けた」は終止格であつて意義が終止してゐる。「すると」に對して何等の關係を持つてゐない。故に

形式上「——」と「——」とは補語と形式語との関係ではない。無関係である。所が「すると」は内々前言「——」の意義を利用してゐる。前言は「すると」に利用されながら利用されてゐることを知らずにゐる。

この「すると」を「そうすると」の省略と思つてはいけない。「そうすると」云へば「そう」は一致の客語で「する」はその歸著語である。右の例の「すると」は「そう」などといふ媒介なしに直接に前言を利用するのである。稍古い口語では「して」も用ゐられた。

「若君菅秀才の御身代り、御役に立て、下さつたか、まだか、様子が聞きたい」といふにびつくり、「してして其れは得心か」「得心なりやこそ此の經帷子六字の幡」「ムム、してその許は何人の御内所」と尋ぬる内に……寺小屋
動助辭から分化して寄生形式動詞となつたものが澤山有る。

この本は大變難しい本だ。

けれども
てすけれども
だけれども
ですが
だが
ではあるが

讀めばわかる。

この本は大變難しい本だ。

だから
てすから
であるから

中々わからない。

の「——」などは皆寄生形式動詞である。

これらを接續詞と思ふのは俗解である。接續するしないは問題ではない。接續してもしなくとも動詞は動詞、副詞は副詞、助辭は助辭である。

甲「あの人も来るだらうなあ。」乙「だらうと思ふなあ。」

の「——」なども寄生形式動詞であるが接續などはしない。

- 單純形式動詞……………(勉強)する (御歸り)なさる
- 修用語を承ける形式動詞……………(笑つて)居る (行つて)しまふ
- 連體語を承ける形式動詞……………(有る)やうです (來る)のです
- 主語客語を承ける形式動詞……………(善い音が)する (官吏に)なる
- 接頭形式動詞……………打つて(變る)
- 寄生形式動詞……………すると 得て(そうなり易く)

形式動詞

詞の格

第八章 詞の格

第一節 格の總説

部分の全體
に於ける立
場

格は詞の運用の一態であつて其の詞の斷句中に於ける意義の斷續のぐはひを示すものである。例へば終止格は意義が斷絶し、連體格は體言へ連續し、連用格は用言へ連續する。簡單な説明としてはこれで要領を得て居る。しかし我々はまう少し格の本質を明にしたい。凡そ一つの成立體は或る材料から成立する。そこで凡ゆるものに於て、その成立體といふ全體を構成する各材料は全體に對して各その立場が有る。例へば戸主と家族とより構成される家に於て、戸主は家に對してその全體を代表する獨立の立場に在る。家族は家に對して全體を代表する立場には在らずして戸主に從屬する立場に在る。

詞の斷句に
於ける立場

詞が斷句を構成する場合もそうである。「月が出る」といふ一斷句中に於てその斷句の全體を代表し獨立の立場を占めてゐるものは「出る」である。「出る」は事件である。「月が出る」といふ事件の代表部である。「月が出る」は事件であつても「月が」は事件ではない。「月が」は

「出る」に從屬してその事件の主體を示すといふ部分的任務を果すだけで全體を代表するものではない。その立場は從屬的である。

詞が斷句を構成した場合には上述の如く各の詞皆その立場が有る。詞が離れ／＼に在る場合には立場はない。「月が出る」の「月が」は主語であるが「月が」だけ孤立してゐる場合は主語ではない。しかし他日斷句を構成したらむ場合に或る立場を占むべき資格は孤立の「月が」にも有る。孤立の「月が」の持つてゐる資格は他日主語になり得べき資格である。この資格は主格である。そこで次の如く言へる。

格の定義

格とは詞の運用の一態であつて、詞が斷句の材料として斷句中に用ゐられた場合に、從屬的立場を占めるか代表的立場を占めるか、その占むべき立場に對する資格を示すものである。

凡そ詞は一つとして斷句中に用ゐられないものは無い。故に詞は必ず皆格が無ければならない。

詞の中、名詞、動詞の二つは格が複雑である。格の問題は文法上最も重要なものであるが、名詞の格、動詞の格が特に重要である。

副詞、副體詞、感動詞にもそれぞれ格が有る。格がないならば斷句中には用ゐられない筈である。しかし副詞、副體詞、感動詞の格は甚だ簡單である。副詞の斷句中に於て取るべき立場は常に連用的であり、副體詞は常に連體的であり、感動詞は常に終止的である。故に副詞は唯連用格といふ一格を有し、副體詞は連體格といふ一格を有し、感動詞は唯終止格といふ一格を有するのみである。

格といふ概念は西洋人が考へ出したものである。しかし、西洋では名詞(代名詞を含む)の格をのみ言つて動詞の格を言はない。それは西洋の動詞の格が貧弱なために其處まで徹底しなかつたのである。尤も西洋でも動作詞、形容詞、副體詞などが連體語となる場合に名詞の格と照應するための格は有る。例へば「白き花を愛す」の「花を」が他動格であるから「白き」もこれと照應する爲に他動格の語尾を取る。故に我々は格を區別して主要格、照應格といふ。「花を」が他動格であるのは主要格である。「白き」が他動格であるのは照應格である。日本語には照應格は無い。故に我々が單に格といふのは主要格を指すのである。

第二節 名詞の格

名詞の表現相

名詞はその概念の表現に關して表示態、敘述態、指示態、喚呼態の四相が有る。

表示態はあたりまへな用法であつて、單に概念を表示するだけで全く判斷力の加はつて居ない表現相である。

花を觀る 花の色 舟に乗る 月の光
の「」などがそうだ。

敘述態は名詞が動詞の様にその觀念に明確な判斷が加はつて敘述性を帯びたものである。

苦は樂の種。 酒は百藥の長。
親の物は子の物。 ならぬ勘忍するが勘忍。

の「」の類である。「種だ」「長だ」……といふ様な意である。但し「種だ」……と云へば名詞でなくて名詞性動詞である。「だ」なしに「だ」の様な意味を帯びる用法が名詞の敘述態である。

指示態は單に事物を表示するだけでなく事物を指示するものである。次の「」などがそ

51

うだ。

やあ、綺麗な花。

あら、大變な雪。

まあ珍しいかた。さあどうぞ。雑巾。雑巾。

これらは單に概念を表示するのみでなく、その概念の内包的意義が働いてゐる。名詞であつてもその内包に重きを置くのである。

喚呼態は對者を呼掛ける用法である。次の「 」などがそうだ。

おい、自動車屋。

先生、どうぞ此方へ。

お父様、お早うございます。

旦那、どちらへ。

これは他人を喚呼して自己の話の對手としての意識を呼び起させようとする主觀的意義が含まれてゐる。

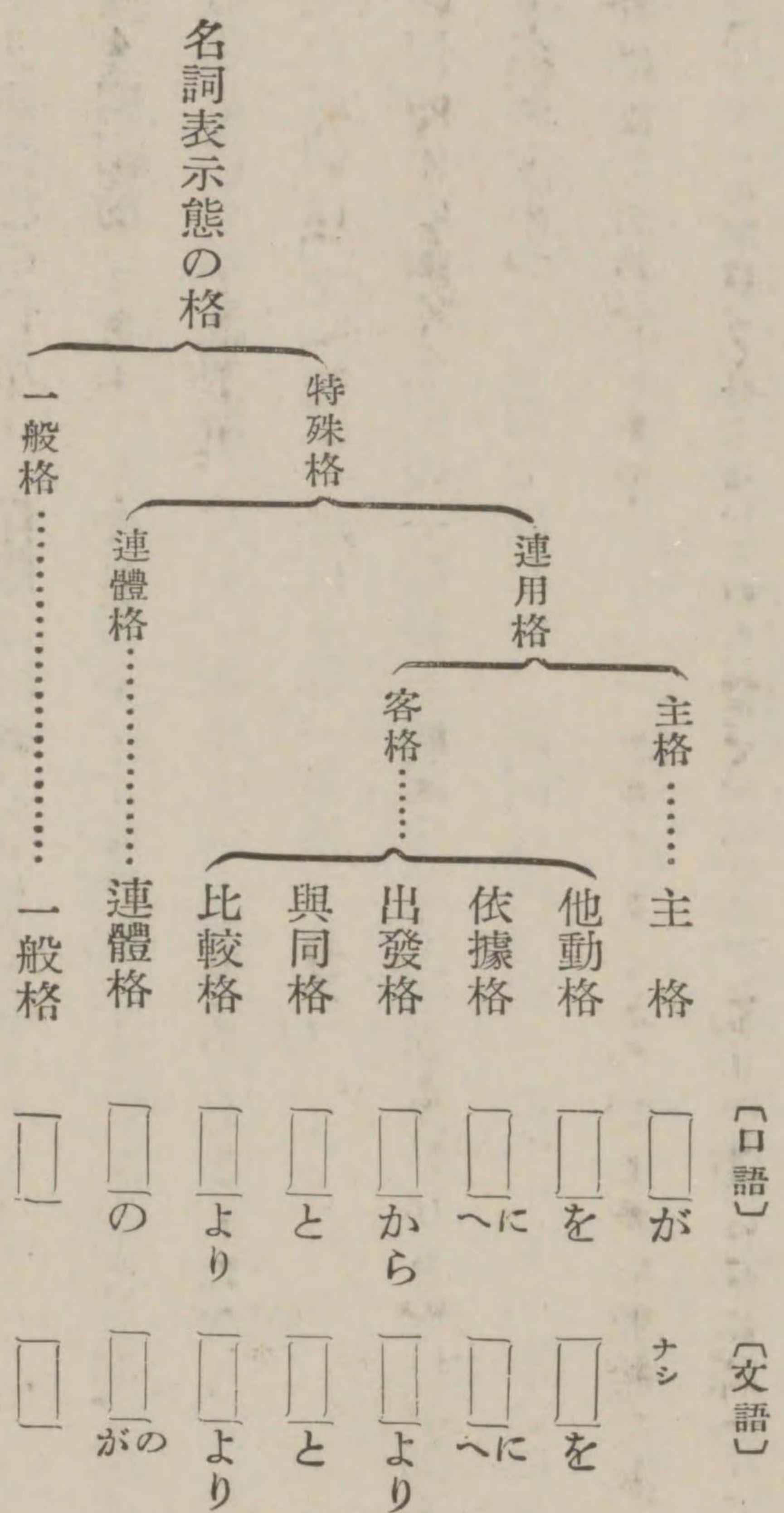
名詞にはこの四相がある。一口に名詞の格と云つても此の四相の其れづゝに格が有るのである。この中表示態の格が最も精密である。他の三相の格は極めて簡單だ。

表示態の格

表示態の格

名詞表示態の八格

普通、名詞の格といふのは主として表示態に就いていふのである。名詞の表示態には格が八つ有る。



右の表の「 」は、無格の名詞を代示したものであるから「 」の處へ何でも名詞を當てれば善い。

「 が」は口語では主格になつてゐるが文語では連體格である。「君が來ませる」の「君が」なども主體的連體格(第二五頁)で、主格ではない。文語には主格はない。一般格を使ふ。

一般格は用法の廣い格であつて細かい區別のないものである。主格の代用にも客格の代用にも連體格の代用にも、又副詞的にもなる。例、次の「――」。

- 1 主格の代用 御飯まだ出来ないか。(主格は「御飯が」)
- 2 客格の代用 御飯食べてから出かける。(客語は「御飯を」)
- 3 連體格の代用 洋服裁縫處。(連體格は「洋服の」)
- 4 副詞的 今日歸る。十時間勉強する。三箇處照會する。

一般格は之を示す助辭がない。無格と同じ形である。便利な代りには不明確な場合がある。漢文の名詞は「之」「焉」の外は全部一般格である。

右の例の(4)の如く名詞の一般格が副詞の如く用ゐられたものは副詞と誤解され易いが、やはり名詞であつて副詞ではない。副詞は内包詞であつてその概念に外延性が無いが名詞には外延性が有る。

西洋でもこの點はよく分らないものと見えて、「私はあなたより一寸高い」などの「一寸」を副詞だとも名詞だとも云つてゐる。或は「一寸」の前へ前置詞「を」を置き得るから「一寸」は名詞であるとか、或はアングロサクソン時代の語で「一寸」は依據格を用ゐたから「一寸」は名詞だとか、種々のことをいふが、要するに名詞の修用的用法といふことが分つてゐない。「一寸」の前に前置詞が有れば「一寸」は前置詞に對して客語である。「一寸」が依據格ならば勿論その「一寸」

は「高い」に對して客語である。然るに「一寸高い」の一寸は修用語である。「一寸」は名詞ではあるが西洋人が「一寸」を名詞だと云ふ論は理由が立たない。

依據格の「に」(第三頁)とニ活動助辭の「に」(第一五頁)及び與同格の「と」(第三頁)とト活の動助辭の「と」(第一五頁)とを混同してはならない。ニ活ト活の「に」「と」の附いたものは名詞性形容詞である。

敘述態、指示態、喚呼態の格

名詞の敘述態、指示態、喚呼態には唯一一般格が有るだけで他の格の格はない。一般格は用法が廣く種々に用ゐられるものであるが、此等諸態の一般格は多くは終止格の代りに用ゐられる。

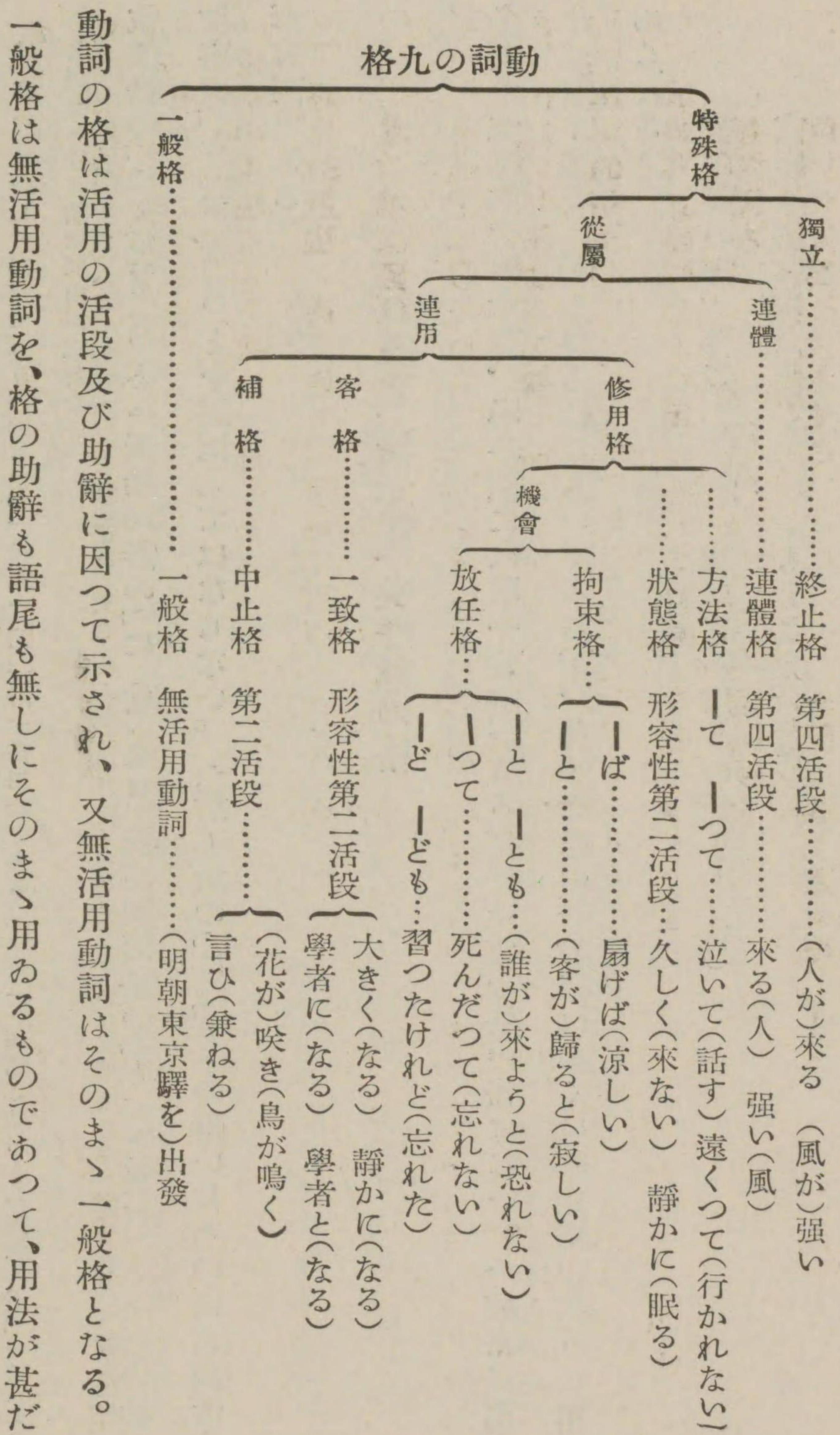
- 苦は樂の種。(敘述) 嘘はどろぼうの始まり。(同)
- 玄關へ御客様。(指示) もし貴方。(喚呼)

これらの「――」は一般格の終止的用法である。然らばなぜ終止格と云はないか。それは終止の記號がないからである。且つ稀には終止以外の用法も有るのである。

敘述態、指示態、喚呼態の格

第三節 動詞の格

動詞の九格
一般格



動詞の格は活用の活段及び助辭に因つて示され、又無活用動詞はそのまゝ一般格となる。一般格は無活用動詞を、格の助辭も語尾も無しにそのまゝ用ゐるものであつて、用法が甚だ

廣い。

無活用動詞といふ中には、本來無活用なものゝ外に、活用の或る活段を固定させて無活用化させたものもある。

一般格の用法は凡そ次の二種である。

一 終止的用法 終止格と同價值に用ゐられる。例「泣いた」。

私の弟は國語は少し善いの、數學は丸でだめ。

まあよく似てゐること。お兄さんにそつくり。

この時護國寺の鐘が微かにごーん。

二 連用的用法

1 單純形式動詞の上に用ゐられて補語となる。例へば次の「泣いた」。

賛成する

泣いたり笑つたりする

ぐつたりする

旅行致す

天氣も悪し道も遠しする

はつきりする

2 中止格の代りになる。例「泣いた」。

今夜は京都へお泊り、明晩は東京へお着きになる。

君は身體は丈夫、信用は厚し、美しいなあ。

無活用動詞の下に形式動詞が有つた場合は無活用動詞も一つの動詞、形式動詞も一つの動詞である。例へば「賛成する」は「賛成」も一動詞、「する」も一動詞である。故に二者は連詞的動詞となる。

無活用動詞の下に動助辭の「な」「だ」です」が有れば一つの有活用動詞になる。「丈夫な」「丈夫だ」「丈夫です」は何れも一動作詞である。無活用動詞の下に「活の」「に」「と」が有れば一つの形容詞になる。例へば「丈夫に」「立派に」「すらく」と「はつきりと」は何れも一つの有活用形容詞である。

第四節 格の體言化

格の體言化
體言と用言

體言と用言

體と用とは東洋哲學に於ける觀念取扱上の範疇であつた。もと佛家に出で、儒家に入つたものである。其れを我が國の學者は言語の研究に利用した。西洋にも本體と屬性、主體と作

體と用

① 體言と用言

用等の概念は有つたが、未だ東洋に於ける體用といふ様な統一された者には至らなかつた。體は有形無形に拘らず凡ゆるものを靜止状態に置いて考へた概念である。用は凡ゆるものを活動状態に置いて、その物から派生すると考へられた點だけをそのもの、體から離して考へた概念である。例へば「机」といふものは靜止的に考へれば机そのものであつて體である。書を讀み字を書くの用に堪へるといふ、机の我々に與へる價值能力は机の用である。故に體は實體であつて用は運用である。

言語も體用の二面から觀察される。古人は體の言、用の言など、云つたが、そう明確な考ではなかつたらしい。後語尾の活用の研究が起つて活用しない語を體言と云ひ、活用する語を用言と稱する傾向を生じた。權田直助、落合父子の如きがそうだ。更に又西洋文典の品詞別から、名詞代名詞を體言とし、動詞形容詞を用言とする人も出た。故大槻博士などがそうだ。

東洋哲學に於ける體用の概念はそんな約らないものではなかつた筈である。體用といふ價值ある語がそんな約らない役目に用ゐられるのは言語の死用といふべきである。古人は體用といふ語を有意義に用ゐる始めたが、大成しない内に邪路に迷ひこんだのである。活用の

體用二字の
死用

有無ならば活用語、非活用語でも有活用語、無活用語でも善い。名詞、動詞の別ならば名詞動詞で善い。雞を殺すに牛刀を用ゐると牛を殺す時に差支へる。

ものを其の運用から離れて其の自體だけを一物として考へたのが體である。ものをそれ身體から離れてその運用だけを考へたのが用である。

言語に就いて言へばその言語が實際へ用ゐられる場合は人はその運用を主として考へるから用である。用を主として考へられた言語は用言である。例へば人を呼んで「來い」と云へばそれは命令を表す爲の實用の語であつて命令は言語の用であり、「來い」は用言である。又「今日は日曜か」と問はれて「いや月曜」と考へたとすれば、その「月曜」は答であつて答へることは言語の用であり、その「日曜」は用言である。

言語が實用に供せられて居る居ないに拘らず言語の或る部分が、一つの實質として指示されたものを表す場合はその指示の對象は體でありその語は體言である。例へば「舟に乗る」に就いて言へば「舟に」は用言であるが「舟」だけ考へれば體言である。又「舟には乗らない」に就いて言へば「舟には」は用言である。「は」に由つて指示された「舟に」は體言である。前の「舟に」と違ふ。又「舟に乗りはしない」の「舟に乗りは」は用言であるが「は」に由つて指示さ

れた「舟に乗り」は體言である。

されば體言用言の別は同じ語でも用法に由つて變るので、彼の活用の有無や品詞別の如きものではない。古人が體の言、用の言と云つたのはこういうことが言ひたかつたのであらうと思ふ。

無格を體とし有格を用とする。

私は何品詞に拘らず無格なものを體言といひ有格なものを用言といふ。無格とは「山」「川」などの様に用法のまだ定まらないもの、有格とは「山へ」「川を」などの如く用法づけられたものである。然らば體言用言と云はなくても有格語無格語と云へば善い様であるが、そう行かない。何となれば有格のものも一つの物の如く取扱へば無格の如くなる。「山への便り」「河をば渡らず」などの「山へ」「河を」は「山へ」といふもの、「河へ」といふもの、如く取り扱はれてゐる。この場合の「山へ」「河を」はこゝでは體言である。これは「有格の無格化したもの」などと云ふよりは直に體言といふ方が便利である。私は體言といふ語をこゝにいふ風に有意義に有價値に使ひたいと思ふ。

拙者女子標準日本文法に體言用言と云つたのはそんな難しい理論の上を用ゐたのではない。世俗の通り名詞代名詞を體言とし動詞形容詞を用言としたのである、これも行く／＼は體言用言と云はない様にしたものである。

體言動詞

體言動詞

體言動詞の格には主格、出發格、比較格、依據格等有る。

主格

1 友だちを訪ねたが不在だった。

2 友だちを訪ねた所が不在だった。

右の例の(1)「」は體言動詞であつて、「が」が附いた「」は主格であり、下の「」に對して主語である。(2)の「」も同様であるが、これは名詞である。(1)の「」も(2)の「」も何れもその事の場合(機會)を表す主語である。

友だちを訪ねた場合が友だちが不在の場合であつた。

の意である。こゝに主語は人間の思想に於てのみ主體概念として取扱はれた所の概念を表すものである。之を主觀的主語といふ。

主觀的主語

勘當した以上は博打を打たうがお前の達手、どろぼうをしようが此方の知つたことではない、病まうが死なうが掛り合なした。そゝいふ悪い遊はしないが善い。

右の「」は假定を表す體言動詞で「が」が附いて主格である。

出發格

郊外は水道が無いから水が不便だ。

あの料理屋は女將が死ぬからけちが附き出した。

右の「」は體言動詞であつて「から」が附いて出發格となり、下の「」に對して客語である。

比較格

酒をやめる方が煙草をやめるより容易だ。

右の「」は體言動詞で、「より」が附いて比較格である。

依據格

金を儲けるには三かくでなければだめだ。

汽車へ乗るに時間を考へずに飛び出す奴が有るか。

醫者が云ふに彼の人の病氣は中々重いさうだ。

日があたつてゐるのに雨が降る。

随分怠けたのに及第した。

右の「」は體言動詞で「に」が附いて依據格である。最後の二例の「に」の上の「の」は形式動詞(第四頁)である。「」の全體は連詞的體言動詞である。

以上に挙げた體言動詞は皆有活用動詞の第四活段が無活用化された體言である。事物を表すのではないから名詞ではないが、名詞の様に主格、出發格、比較格、依據格等になる。

連用格の體言化

連用格の體言化

名詞はもと體言であるが、それが格を帯びると用言化する。例へば「人」は體言だが、「人と争ふ」の「人と」は連用格で用言である。

連用格は名詞にも動詞にも副詞にも有る。例へば、「人と」は名詞の連用格、「歸つて」は動詞の連用格、「暫く」は副詞の連用格である。

そうして凡べての連用格(用言)は次の「 」の如く體言化することが有る。

イ 人との争

東京への歸り

外國からの電報

ロ 東京へ歸つての翌日

高山としての富士山

宜しいとの御一言

その祝盃は成功したらたの事だ

ハ 東京での金持

火事での損害

ニ 日本に於ての高山

暫くの間

以上は(イ)の「 」は名詞の連用格、(ロ)の「 」は動詞の連用格、(ハ)の「 」は名詞性動詞の連用格、(ニ)の「 」は副詞の連用格で、何れも體言化してゐる。なせ體言化するか、それは恰も一つの物の如く一つの實質として考へられるからである。そうして下へ「 」が附いて連體格になつてゐる。

終止格の體言化

終止格の體言化

終止格の語は本來用言である。しかし之を一つの物の如く見て一實質として取扱へば體言化する。その體言化したものは次の「 」の如く名詞となることも有る。

損になるか得になるかを考へて見よ。

人物の善い悪いが第一だ。資格の有る無いは第二だ。

しかし次の「 」様に名詞とならず、體言動詞として形式動詞の補語になる場合が有る。

1 道も遠し天氣も悪いする。

道も遠いし天氣も悪いする。

補語

雨が降つたり雪が降つたりする。

あの店は親父もぐづだし息子もぐづだしして發展はとても望まれない。

2 親父も使ふ息子も使ふしてとう／＼家を潰してしまつた。

右の(1)の「――」は第三活段不十分終止格で(2)の「――」は普通の終止格であるが、何れも體言化して下の「する」「して」に對して補語となつてゐる。

連用格の提示

連用格の提示

各詞の連用格は本來用言である。一般格も同様である。

舟に乗る

泣いて話す

早く来る

今日行く

の「――」の類皆用言である。然るにその下へ提示助辭が附いて

舟には乗る

泣いても話す

早くさへ来れば

今日でも行けば

などの「――」の如くなるものが有る。之を連用格の提示態といふ。

しかし提示態は提示助辭が附いて始めて提示されるのではない。實は提示助辭の附く様な時は提示助辭の附かない前に格が提示されてゐるので、提示助辭は唯その提示を詳密にす

るだけである。例へば「學校へ這入る」「學校へ這入らない」の「學校へ」は平説であつて提示されず即ち用言であるが

僕、あんな學校 決して這入らない

の「あんな學校」は單説であつて平説ではない。即ち提示されてゐる。名詞の一般格の提示である。

僕、あんな學校へ、決して這入らない

と連用格に云つても大抵ならば「――」が提示されてゐる。これは依據格の提示である。下へ「は」が附けばその提示が詳しくなるだけである。「は」などがなくても提示ではある。

連用語は用言であり、その提示されたものも用言である。しかし連用語が提示されるにはその前に一度體言となる。何となれば提示は用であるが提示の對象は體である。連用語といふ用言は體言化した上で提示されて再び用言化するのである。

第五節 格の含蓄態

格の含蓄態

終止格はその用言たる用法に在つては必ず意義が終止獨立する。一般格の終止的用法も同

様である。
他の諸格は皆從屬格であつて意義が終止せず、下の語へ從屬する。一般格の從屬的用法も同様である。

然るに從屬格及び一般格の從屬的用法も、自己の當然表すべき概念以外に他の觀念を含蓄しその含蓄した部分に由つて意味が終止する場合がよく有る。例へば客を迎へて「さあどうぞ」など、いふことが有る。「どうぞ」は副詞であり副詞は常に連用格であるから意義が終止しない筈であるが、「さあどうぞ」の中に「お上り下さい」といふ様な觀念が含まれるから、その含まれた「お上り下さい」といふ命令的意義に由つて意義が終止する。これを格の含蓄態といふ。含蓄態は終止格と同様の効果を以て斷句の代表部になる。これは決して省略ではない。音の省略といふことは有るが文法上には言語の省略といふことは無い。所謂省略とは含蓄といふことの俗解である。

言語の省略といふものは無い

標準日本口語法 終

□□□	標準日本口語法	□□□
昭和五年二月十五日印刷		昭和五年二月二十七日發行
著者	松下大三郎	發行者
著作權	中村時之助	印刷者
所有	福井安久太	印刷所
	東京市牛込區辨天町一七四番地	安久社印刷所
		東京市芝區新橋驛島森口角
發行所	中文館書店	
東京市牛込區辨天町一七四番地	電話牛込三三二五番 振替東京三八四二七番	
定價	參圓五拾錢	

廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	東京高等師範學校教授 文學士 垣内松三先生著	東京女子高等師範 學校教授 文學士 佐伯常麿先生著	東京高等師範學校講師 芝野六助先生著	東京高等師範學校講師 芝野六助先生著	前東京女子高等 師範學校訓導 土屋敏雄先生著	成城小學校訓導 奥野庄太郎先生著
概觀日本文學史潮	室町文學選集	江戸文學選集	明治文學選集	國語教授原論	女子作文新編	國語讀本批判的解釋 一學年用	國語讀本批判的解釋 二學年用	最新國語便覽	學習室文庫
四版 菊判全一冊洋綴 紙數四五〇頁 定價金四圓 送料金拾八錢	新版 四六判全一冊洋綴 紙數三三〇頁 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾八錢	八版 四六判全一冊洋綴 紙數四五〇頁 定價金參圓參拾錢 送料金拾八錢	十版 四六判全一冊洋綴 紙數三五〇頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾八錢	新版 菊判全一冊洋綴 紙數五〇〇頁 定價金四圓五拾錢 送料金拾八錢	新版 菊判全一冊洋綴 紙數五〇〇頁 定價金壹圓參拾錢 送料金拾八錢	三版 菊判全一冊洋綴 紙數三四〇頁 定價金貳圓七拾錢 送料金拾八錢	再版 菊判全一冊洋綴 紙數四三〇頁 定價金參圓三拾錢 送料金拾八錢	新版 三五判全一冊洋綴 紙數四五〇頁 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾八錢	新版 一二期三期四期五期六期 紙數全全全全全全 定價各二三十千 送料七錢 真冊冊冊冊冊冊
我邦二千有餘年間の文學の精華を最も詳細に組織的體系に依り、思評す、文學史中第一位を占むべきを確證す。	當時の文學史を掲げ次に室町前期、中期、後期二百六十年間の各種文學の代表的傑作を擇集す。	江戸文學史の概略を、紋し同時代の代表的作品、小説、浄瑠璃、脚本、和歌、俳句、狂歌、川柳等劃切なる批判適當な註を加へたるもの。	本書は明治文學史の概略を敘し、其時代の傑作名文を執り、深刻なる批判を加へたる現代國文學研究の一大道場である。	國語教授術や方法論の超越した學理的、研究の基礎で先驅者として眞摯なる所説は誰人も肯定し得る。一般教育家、文檢受檢者の必讀書。	作例を諸大家に引用し、實習用兼備、卷末日用文には、懇切丁寧なる好著。	教育界に於て種々と論議せられつゝある尋常小學校國語教授の根柢を本書に依つて完全に培ふ事が出来る。懇切限なき新研究である。	小學校國語讀本教授上の根柢を確立する事、本書に若くはなく、最も斬新なる新研究として、教育界に推奨し得るものと信ず。	國語一切に涉り兒童の最も誤謬多きものに就て一字一語忠實に其の資料を調査せしものである。	世界の著名なる兒童文學は勿論、科學、地理、逸話、傳記等に涉り、弘く紹介す。クラスライブラリーとして好適。

585
130

